

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 8 号

特別寄稿

阿部 昭の鵠沼風景〔下〕 島本 千也 ... 1

特別寄稿

はす池 断想 吉田 敏平 ... 31

「湘南アカウミガメ物語」 宮戸 光 ... 34

宮崎弥代子さんの

「大正・昭和の鵠沼の思い出」 企画担当 ... 38

特別寄稿

エッセー「くげぬま断章」(I) 山上 英男 ... 46

森志げ女『死の家』に見る鵠沼村 渡部 暁 ... 50

今井達夫遺稿④ 「香煙の壁」 今井 達夫 ... 55

「鵠沼を語る会」活動の記録 総務担当 ... 63

編集後記 67

『新編相模風土記稿』(天保13年、1892)に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

阿部昭の鵠沼風景〔下〕

島 本 千 也（鵠沼海岸在住）

第三章 阿部昭作品に登場する主な場所

1 乃木女学校附属幼稚園（現、湘南白百合学園付属幼稚園）

阿部昭は、1939（昭和14）年、5歳の時乃木幼稚園に入園している。この時の記憶は、小説「千年」、エッセー「マスールのおもいで」（1972年）の中に描かれている。湘南白百合学園は、現在も女子だけの学園であるが、幼稚園は男女ともに入園を認めていた。乃木幼稚園という名前は、海岸に乃木大将の大きな銅像があったことから、戦意高揚の国策により改名されたものであった。乃木大将の銅像は、戦後、いつの間にか撤去され、台座の石は新しい駐車場の入り口に残っている。

湘南白百合学園では、最近まで、「おはよう」「さようなら」などの代わりに「ごきげんよう」の挨拶が伝統として残っていた。



乃木大将銅像

2 藤沢市立第一国民学校

藤沢市立第一国民学校は現在の藤沢小学校である。藤沢駅の北側、砂丘上の一番高いところに現存している。もっとも、学校前の道路は新道であり、当時はまだ開通していなかった。国民学校の名前は1941（昭和16）年から1947年までの小学校の呼び名である。戦時下の戦意高揚を背景とした名称の変更である。阿部昭の入学は1941年、国民学校となった最初の年に1年生とし入学したことになる。自筆年譜には

「幼稚園でミッションの特異な雰囲気と教育方針に感化されたため、入学後しばらく違和感に悩まされる。」と記している。

藤沢市は、東海道線路の北側と南側では市街地の成り立ちが大きく異なる。北側は、古い宿場や商家などを中心とし、南側は明治以降の別荘を中心とした新開

地と言える。したがって、集まってくる小学生にもその家庭環境は反映していた。

「藤沢」（『文藝春秋臨時増刊』7月10日発行）という短い文章の中に、東海道線の北側と南側の違いについてふれている。

自筆「年譜」には

「国民学校の粗野で殺伐な空気に圧迫されたが、徐々に馴化、土着の子弟の間で揉まれるうちに虚弱だった体質も改善された。」とある。

国民学校には、線路の北側の宿場の子供たちや商家や職人などの子弟が中心であった。家庭環境、子供の気質はお互いに大きく異なっていたようである。線路の北側の子弟との交わりは阿部少年にとって、鍛錬にもなり、外の世界へと出て行く一歩ともなった。戦後の藤沢第一中学校への入学も同じような構図になる。

「日経新聞」（1985(昭和60)年9月8日）に掲載された「黄金の日々」というエッセーは、かつての国民学校時代の木造校舎が取り壊されることを知って、38年ぶりに6年間を過ごした校舎を見学に行ったときのことが書かれている。太平洋戦争開戦の年に入学し敗戦の翌々年に卒業した当時のことを「黄金の日々」と回想しているのが印象深い。

3 藤沢市立第一中学校

1947(昭和22)年、藤沢市立第一中学校へ入学した。新制中学校の第一期生である。小田急線鵠沼海岸駅から藤沢駅へ出て、そこからは徒歩である。現在ある鵠沼中学校は開校はしていたが校舎は小学校に間借りであった。湘洋中学校はまだ開校していない。第一中学校は、次に進学する湘南高校の西側に接して立地している。戦後の占領下であり、野球熱が盛んであった。当初は野球部に所属していたが、運動部の体質になじめずに、演劇部に所属するようになる。自筆年譜には「少年時代の最も楽しかった三年間。」と記している。

4 神奈川県立湘南高等学校

1950(昭和25)年、県立湘南高校へ進学する。湘南高校は大正10年の創立で、旧制中学では、県立第一中学（希望ヶ丘高校）、県立第二中学（小田原高校）、県立第三中学（厚木高校）、県立第四中学（横須賀高校）、県立横浜第二中学（横浜翠嵐高校）、などと比較すると、新興の勢力で、戦前にあつては、陸軍士官学校、海軍兵学校などへの受験に熱心であった。戦後の新制高校になって、かつて

の、軍国主義教育への反動はあったが、進学実績などは、県下屈指の名門校として発展していく。野球部が甲子園で優勝したのは、阿部昭が入学する前年(1949年8月20日)のことであった。「一年先輩には石原慎太郎、葉山峻、同期には、吉野壮児、榊居祐三などがいた。」(『年譜』)

自筆年譜には

「敗戦以来の波乱万丈、自由奔放の生活にやっと一と区切りがつき、中学時代とは打って変わって消極的な、悩むことの多い毎日になる。英語、国語以外の課目に急速に興味を失う。図書室の文学書をぼつぼつ読み出し、自分の将来を漠然と文学に結びつけて考えるようになる。」

と記している。

『単純な生活』の中に、高校時代の国語の授業を振り返った文章がある。徳富蘆花の『自然と人生』中の「湘南雑筆」にふれた後、

「ところで、私はさきほど蘆花の文章を写している最中に、突如として、三十年前のあることを思い出したのである。「初午の太鼓^{とうとう}鑼々たり。梅花は已に六七分、麦は未だ二三寸。」という文句に見覚えがあり、それからそれへと見て行くうちに、たしかこれだと確信するに至った。— どうでもいい話だが、私はこれが高校二年の国語の試験に応用問題として出されたことを思い出したのである。そして、その出所が実はこの「湘南雑筆」であったことを三十年後のいま、ようやく知らされたというわけなのである。「なあんだ、これだったのか」と私は思った。

問題はたしか「つぎの文章を年頭から年末まで季節順に並べよ」というふうなもので、蘆花の文章が一、二行ずつ、十ばかり並んでいた。易しいようでいて、なかなか微妙な出題だった。私も一部間違えた。それでよけい印象に残っていたにちがいない。

「夕風そよ吹きて、新樹空にそよぎ、麦圃^{ばくほ}も静かに波うちつゝあり。」はすぐ四月と判るが、「風止みて、揺動せる空気は^{えいぜん}瑩然と凝りぬ。此頃の空気は金質有り。」が十一月だというのは相当むずかしい。三十年前、高校生の私が頭をひねった問題は、息子たちにはおそらく歯が立つまい。」

湘南高校での国語の授業が、レベルの高い内容であったことが理解できる。

湘南高校時代のことは「マラソンの友」というエッセーでもふれている。

「どういふものか、高校生活の三年間にはあまり楽しい思い出がない。」という書き出しで始まり、マラソン大会にまつわる思い出を、旧友の記憶の中にある出来事として描いている。(1979年)。

阿部昭の長男は父に次いで、湘南高校へ進学している。1979(昭和54)年、母校の体育祭の見学へ出かけている。

「ついこの間、息子が行っている高校の体育祭というものを見物した。

三十年前には、この私も、そこの高校生だった。実に三十年ぶりに母校のグラウンドに立ったことになる。

三十年のうちに、なにかも一変していた、(中略) いまではバックボードの陳列、仮装行列、ダンス、パレードなど、かつての余興的なものが主流をなしていることである。仮装行列も、ただねり歩く行列ではない、ほとんどミュージカルの域に達した手の込んだもので、グラウンドいっぱいに展開される。全体の印象を一口で言えば、はなやかで、技巧的で、享樂的である。」

湘南高校の地番は、藤沢市鵠沼神明5丁目6番10号。藤沢一中も同じく、鵠沼神明である。阿部昭の作品の舞台である、鵠沼の中である。旧村の鵠沼村は九つの集落に分かれており、旧東海道(現県道43号線)から海(海岸)までの範囲を含んでいる。北は藤沢宿、東は片瀬村、西は羽鳥村、辻堂村に接している。しかし、明治20年に東海道線路が敷設され村を二分している。線路を挟んだ南北間の交流は少なくなっている。南側の鵠沼海岸には伏見稲荷神社が分祠され、別荘地には賀来神社が分祠されている。しかし、鵠沼村の氏神は皇大神宮神明社(烏森神社)であり、現在も8月の祭礼には各町内から山車が出て渡御する。湘南高校の場所は鵠沼(神明)の中にある。

5 藤沢新地

「緑の年の日記」は昭和30年、大学2年生、20歳の年1年間の日記を基にして、それから30年を経た作者が振り返った小説作品である。主人公は、大学へ行く他は、家庭教師のアルバイト、神田の古書店、川崎での映画鑑賞などに熱心に通っている。青年らしい性的な欲求にも悩まされている。その不満により、不機嫌でいらした日々も過ごしている。友人の自慢話などにも大いに刺激を受け

ている。暑い夏の一夜（8月7日）、意を決して藤沢の遊郭街、新地へと出かけている。

藤沢新地は駅北口の銀座通りを入った北側の一面にあり、昭和33年の売春禁止法以前は遊郭街であった。その後も飲食店街としてにぎわいがあったが、現在はかつての面影は失われている。2005年に耐震偽装のマンション問題が発生した場所もかつての遊郭街の一面である。

「八月七日 日曜

薄曇、時折驟雨の一日。

午後、東京の連中と西浜へ行った。最高の人出だそうだが

今は何もする気がしない。ひどく不機嫌だ。一体こうして毎日いらいらしていることに意味があるのか。浜辺に転がっている女の身体についてつくづく考えさせられてしまった。

（中略）

八時過ぎ、藤沢へ行った。

（中略）

「梨花」の明子を選んだ理由は、まったくの偶然だ。暗闇で、おまけにこちらの混乱から相手の顔を灯の下で詳しく確かめることが出来なかった以上、二度目に引き返した 時の選択の根拠は、店の恰好だとか、女どもの群がりよくだとか、入りやすいか、にくいかな、ということぐらいだ。美醜の問題じゃない。まったく行き当たりばったりだ。

（中略）

清潔な部屋と愛想のいい相手。これだけが幸運だった。これだけとは言うものの、他に別に不服もない。自分は十九に見られ、そのままにしておいた十八でもよかったと思う。彼女が「あなたは十代なのね」と言ってしみじみ自分の顔を見つめた。彼女の（「ひやかし」でない）「お馴染みさん」は三人とのこと。あまりしょっちゅう来ないと言っていた。しかし、今朝は四時半から四時間ぐらいしか寝ていないのだ。いつも昼寝するのにきょうははしなかったと言っていた。映画は見ないそうだが（なぜだろう?）。「梨花」は開業してまもないとは言え、二年余（?）の営業歴を持つ店。土、日に客が多い。検診は火、金の週二回。歩いて一分位のところだと言っていた。「あなた、浮気なんですよ」と最後に彼女は言った。結局、八時四十五分から九時五十五分までいた。

なんだか愛し足りなかったような気がする。それにしても、今夜のことをこうして十二時半まで夢中になって書いている自分も少しどうかしてはいないか。」

6 鵠沼海岸商店街

阿部昭の住まいに、もっとも近い商店街が鵠沼海岸商店街である。阿部昭の生活圏の中では唯一のにぎやかな場所と言える。商店街は東西一キロくらい、銀行や郵便局、スーパー、八百屋、パン屋、古書店などが一通りそろっている。『単純な生活』の中で、この商店街について一つの発見を書いている。

「しかし、もっと発見だったのは、この町には歩き疲れても腰を下ろす場所が一つもないということだった。(喫茶店等の設備は別として、だ。) 東西に一キロ近くはあろうかという商店街のいずれの側、いずこの店先にも、休憩所一つ、ベンチ一つないことに気がついた。」

このとき、阿部昭は病後であり、体力的にはかなり弱くなっていた。それにしても日本の多くの町や村、商店街が、健康な人だけの目線でつくられてはいないだろうか。病人や老人の目線でつくられた町や村、商店街がどれだけあるのだろうか疑問である。

『変哲もない一日』(1984年)の中に商店街の東のはずれにある古書店「大虚堂」が登場する。

「町に出ても別に用事はない。商店街をずっと突っ切って、一番外れのところにある古本屋をこれも半年ぶりぐらいで覗いてみる。店内をざっと一巡するだけ。暫く来なかった間に本の量がずいぶん増えたようだが、それでも大半は背表紙に見覚えのあるものばかりだ。それくらい私は同じ棚の前をこれまでに何度も行ったり来たりしている訳である。したがって欲しい本もないのは承知の上だが、やはりこうして戸を明けて入って見るのである。

(中略)

この古本屋の主人というのが、年格好から長身の軀つき、面差し、音声までがすべて詩人の田村隆一氏と実によく似た好男子である(と私には思える)。つまり田村さんが奥で本の見張りをしていると思えばいい。」

古本屋「大虚堂」の主人は確かに田村隆一似であった。若い頃の肺の病気であろうか、声はしわがれた声をしていた。戦後しばらくは、鎌倉に店を持っていたと聞いたことがある。阿部昭は田村隆一とも友人関係であった。古書店は現在も

あるが、田村隆一本人も、田村隆一似の主人も阿部昭も既になく、過去の人になっている。阿部昭の本は他の高価本と一緒にガラスケースの中に大切に展示されている。

7 辻堂（海軍演習地）

「ところで、戦争は終わったのにわたしの家では毎日毎日ガラスが割れはじめた。海岸の砂丘で進駐軍の兵隊が日本軍の残した火薬の処理をやりはじめたのである。くる日もくる日も朝早くから夕方暗くなるまで、すざましい地ひびきがくりかえされ、その風圧で家のめぼしい窓ガラスはあらかた無くなってしまった。」

「その砂丘も、こないだまでは日本の海軍の演習地だったのだ。子供のわたしはよくそこで空の葉莢をひろった。」

「昭和三十四年六月、旧海軍演習地が解放されるまでは、相模工大から辻堂団地にかけての海よりは、見渡す限りの砂丘地帯であったことは、まだ多くの人の記憶に新しいことでしょう。」

海軍用地と言っても演習さえなければ、だれでも自由に遊べる。言わば国民の広場であった。

しかし、強風が吹けば砂嵐となって附近の畑や道路を埋めてしまう。そのきびしい自然環境の中にコウボウムギ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、「防風」等の海浜植物が生き続けていた。

特に「防風」は、この近辺に〔しか？〕見られない辻堂特有のものと言われ……」（「日記のことなど」）

この後、自転車で「辻堂海浜公園」へ「ボウフウ」探しに出かけて、見事、二株のまぼろしの「ボウフウ」を発見している。

8 江ノ電（鎌倉）

「昔は鵠沼の停留所から、あの江ノ電にがたがた揺られて、窓にさんさんと降り注ぐ日光を浴びながら、海辺の青葉若葉のトンネルを行っただけのものである。鎌倉まで、僅々十キロばかりの短いコースが子供の身には大した冒険旅行のように思われた。」

腰越で、ぱっと視界が開けると、それが、海である。

それから、「真白き富士の嶺」の七里ヶ浜を通過して、新田義貞の稲村ヶ崎へ。

ところが、極楽寺の谷あいを抜けて、唯一本物らしいトンネルに入る頃から、私は毎度怪しい気分におそわれた。あたかも、時間という空間を逆戻りして、暗く、湿っぽい過去の墓穴へと降りていくような、ピラミッドの地底への通路もこんなものだろうかというような。

トンネルを抜ける。とそこはもう鎌倉の町並みである。押し寄せる見物人には、あまたの有り難い歴史記念物を保存する町である。

そこにも、やはり地上と同じ日があたり、普通に人間が動きまわっている！

まさか、これは嘘ではない。なんとなく嘘じみているだけである。すべて、回想の手続きというのが嘘じみて見えるように。

・・・もう戦争が、負けいくさが始まっていた。」（「青葉」）

阿部昭は江ノ電で、自転車で、バスでたびたび鎌倉へ行っている。目的地は、友人の田村隆一の家であったり、由比ガ浜通りの古書店公文堂であったり、県立近代美術館での展覧会であったりする。鵠沼（辻堂東海岸）から、ちょっとした気分転換の楽しめる小旅行であった。それにしても、鎌倉を、「暗く、湿っぽい過去の墓穴」「ピラミッドの地底」と捉える子供の時の感性はさすがと感心させられる。筆者は鎌倉を知れば知るほどは「死者の都市（ネクロポリス）」あるいは「鎮魂都市」という見方に傾いている。

9 書斎

サラリーマン（TBS）時代、二足のわらじを履いていたときの阿部昭の書斎は台所のテーブルであった。1971（昭和46）年10月31日付けでTBSを退職。翌1972年3月、辻堂東海岸に仕事のための仮の住まいをつくり、自宅と仕事場の間を自転車で往復する生活に入った。松林の中の二階屋が阿部昭の創作の拠点となる。

「仕事をしている二階から、近所の家々の屋根がよく見える。潮風にまともに曝される一角なので、どの家も大分いためつけられるいるようだが、松林に囲まれた海辺のボロ家はなかなか風情がある。他に見るべきものがないので、

私はよくそれらの家をぼんやり眺めている。どの家ともつき合いはないから、住んでいる人のことは全然わからない。自分のほうばかりが見ているつもりで、案外観察されてしまっているのは私のほうかもしれない。」

（「窓の愉しみ」1972年）

「話の順序として、私がいま机に向かっている場所からの眺めについて書くと、これが近年いよいよ殺風景になってきて残念である。ただ一つの救いは、東側にまだ二百坪ばかりの空き地があって、お陰で私の二階の部屋は窓を開けるといつも清々することである。ほんの小松だった隣の何本かの松が、いつのまにか伸びほうだいに伸びて、ところどころ枯れた枝葉が赤くなっているのは痛々しいが、それらが向こうの雑然たる家並みを隠してくれるのは有り難い。」

（「草の上で」1986年）

10 松林

湘南の海辺を代表する樹木は黒松である。この地に住んだ人々は、防風・防砂のために営々と黒松を植林してきた。黒松のある風景は、湘南を代表する景観であった。

阿部昭にとっても、黒松のある風景は特別なものとしてあり、小説やエッセーなどにたびたび取り上げている。

「松の木の多い土地で、松林に囲まれて暮らしてきたが、そのことを取り立てて考えたことはなかった。それがいまごろになって気になり出したのは、これも年齢のせいにはちがいなかった。」（「松林、海、日光」『海燕』1985年）

「朝日新聞」1988（昭和63）年2月5日夕刊に発表した「涙」は、辻堂東海岸の自宅東側の二百坪の土地を、新しい地主が購入し、十数本の松の木がほとんど伐採された一連の出来事を描いている。

「湘南・辻堂海岸の拙宅東隣の二百坪の土地には、この間まで大小十数本の松があった。本来は海辺の防風・防砂の松だが、よく育ったのは十メートル前後にもなっていた。そこへ去年の八月のある日、東京からきちんとスーツを着こなした大手企業の社員がやってきて、「ここは板橋の歯科医が買った、家を

建てるので松は全部伐る。」と言った。私は自分のでもない松の運命に暗然とした。」

先の文章を発表する半年前、「松を惜しめる」として短歌を作っている。

松を惜しめる 昭和六十二年八月

藤沢市制定して曰く、クロマツは「市の木」なりと。しかるに仇^{あだ}なす
『西武』ら、ここに濫伐無法、荒廃。無限

明日伐らると知らせありたる松どもはわが撮^{うつ}しけりあわれに思へば
十とせ余りわが目に在りし海ぎしの松伐られむや時^し化に耐へ来て
朝に夕に啼きつる鳥は如何ならむ松伐られなばいづこか往かむ
この松の命やは知る鳥どものあわれ梢に群れてさわげる
浅^{あさ}猿^{まし}きかの商^{あさうど}人や木も鳥も数へざるなり 値^{あたひ}つかねば
生きながら裂かる樹々よ血は見せず声も立てねばわれを泣かしむ
鎖^{チェーンソー} 鋸^なに薙ぎ倒されし松は地に並び臥すかな屍体のごとく
われらも滅びゆくべしおのづから木無く鳥無くけもの無ければ

第四章 阿部昭と海

阿部昭は終生、海を意識しながら生きた作家である。

海軍軍人の家に生まれ、父親は40年近く海上に勤務した。生地は父親の任地、呉に近い広島であった。鶴沼に來たのは父親が海軍省へ転勤になったからである。当時、海軍軍人は横須賀との関係もあり、逗子や鎌倉、藤沢などに住む者が多かった。阿部昭の兄も海軍兵学校出身であり、叔父や従兄にも海軍関係者が多かった。自身も将来は海軍へ行くものと漠然と考えていたようである。

阿部昭は、自らの住所について、海から・・メートルと正確に記している。

最初の家はごく海に近い一角、波の音を聞きながら少年時代を過ごした。

二度目の家は海から1.5キロ。

三度目の家は波打ち際まで300メートルぐらい。

というように海が存在は常に背後に意識されていたと言える。

阿部昭の書いた単行本、エッセーのタイトルにも海は頻繁に出てくる。「あの夏 あの家」、「海からの風」、「海辺の人間」、「海は大きかった」、「海を枕に」、「海浜秋色」、「月夜の浜辺」、「海辺の犯罪」、「夜の海」、「海水浴」、「松林 海日光」等がある。

「鵜沼」について書くということは、海について、あるいは、海の影響について書くということなのかもしれない。

「この海は、私が物心ついてからこのかた三十数年ずっと眺め続けて来た海だ。ふるさとに山や川を持っている人たちが、その山や川をながめつつ生い立って、いつか異郷にあっても、それらがかれらの内なる山、内なる川となっていることに気づくように、私もこの海をそんなふう呼びたい気持ちにかられる。(中略)

だから、私は、むしろ海そのものを語ることはやめにして、その鏡に映ったものの影について書くようにしたい。そうすることによって、海の大きな力を知らせるようにしたい。私の文章が、その一行一行、その一語一語の間隙から、どんな形にしる、いくばくかの海の明るさ、そのひびき、その匂いが立ちのぼるようなものでありたい。」 (「海は大きかった」1971年)

「ちょうど今頃の季節、晴れた暖かい日に、子供たちをつれて海岸へ行き、砂浜に寝ころんでいると、おだやかな日にあぶられて、うつらうつらしてくる。しのびよってくる風ももう冷たくはないし、そうぞうしいバカンスの夏はまだまだ先のことで、あまり人影も見あたらない。水ぎわで子供たちがはねまわったり石をなげたりしているのをボンヤリ見ていると、その影がだんだん遠のいて行って、逆光のスナップのように小さな点々になり、一瞬ふと自分の子供時代の情景のひとこまを見ているような錯覚をおぼえたりする・・・。」

(「海辺の人間」「読売新聞」1971年3月27日)

「昭和四十六年十一月一日は、私にとっては記念すべき退職第一日であった。

その日、まず私がしたことは二時間ほどの外出だった。快晴の暖かな午後で、足の向くままにぶらりと海岸へ出てみると、鵜沼から江ノ島のほうへ行ったあたりでは地曳網を曳いている最中で、海面におびただしい鵜が群れていた。実際何年ぶりかで見る光景だったが、それも、勤めを離れた自由の身で目にするからよけい珍しく映ったのだろう。そのあと、レストハウスで夕日を眺めながらコーヒーを飲み、往時芥川龍之介ら大正文士が寄り集うた東家があった近くを通過して帰ってきた。漠然とながら私も昔のことを思い出して来るようであった。」
(「記憶と回想」『全作品』の余白に) 1984年)

「海をわが友などと呼ぶのは相当気がひける。私が本職の漁師か、船乗りかヨットの冒険家だったら憚らずにそう高言できるだろうが、わたしの仕事は船には縁がない。私の「波を枕に」は、日夜波の音を聞きながら育って今日に至ったという位の意味である。五十年近く海のほとりに住んでいるという誼みで、この海をちょっと友だち呼ばわりさせてもらうことにしよう。

しかし、本当に有り難い相手のことはふだん忘れてるのが常で、私も一年中ほとんど海のことは忘れて暮らしている。歩いて二、三分だが、朝な夕な浜辺を散歩したりと言うこともない。散歩はずいぶんするけれども、めったに海には出ない。姿は見えないが声が聞える、相手がそこにいるというだけで安心しているのである。いわば居ながらに海を呼吸しているわけで、わざわざ会いに行く必要もないのだ。」
(「海を枕に」 1982年)

入院時の体験を書いた「怪異の正体」の中に、主人公の独白として、次のような言葉はある。

「海の声がしない所はすなわち山みたいなもので（そばに海がないと息がつまってくるようだね）」

阿部昭が繰り返し海へ出かけたのも、海を描いたのも、海の上だけは昔と変わらない風景があったからとはいえないだろうか。しかし、海の眺めは昔と変化はなくても、足元の海岸線は塵だらけの海岸線であり、むかしの面影は無惨にも失われていた。

昭和四、五十年代は、高度経済成長の反動として、数々の環境問題が表面化した時代である。海岸線もゴミが散乱し、水質も悪化していた。阿部昭も海岸の環

境悪化について記している。

「私はもともと湘南海岸に居住しているが、近年はもっと海寄りに仕事部屋をこしらえたので、この原稿もそこで波の音を聞きながら潮風に吹かれて書いている。波打際までゆっくり歩いて四、五分である。

しかし、その割には海を見ることは少ない。夏は別として、シーズンオフには一と月に一回ぐらい、それらもちらっと見ただけで、さっと引き揚げる。あとは姿は見えなくても、すぐそこに気配がするからそれでじゅうぶんといいぐあいである。

今日は五月十八日、日曜日だが、久しぶりに砂浜まで降りて行ってみる。

(中略)

相変わらずあたり一面ガラクタが目につくが、やがて七、八月ともなればとてもこれぐらいではおさまらない。ひっきりなしに打ち寄せるちりあくたに加えて、海水浴客が棄てて行くビール缶やジュース缶、弁当殻の山だ。昔だってゴミは出たのだろうが、折箱、竹の皮のたぐいが当節では皆ビニールとか発泡スチロールだから始末が悪い。こわれたバケツや洗面器、御婦人のピンカーラに怪獣のプラモデルの破片、子供が親の目をかすめてこっそり買って吸う、いかにも毒々しい安物ジュースの容器など、ことごとくビニール製である。煮ても焼いても食えない。」

(「渚にて」1975年)

「私が住む湘南海岸は、いまやサーフィンの名所であると同時に、ゴミの名所でもある。

かつては白砂青松がうりものであった砂浜に、あらゆる種類のゴミが散乱している。空き缶だの、空き瓶だの、プラスチックの容器だの。一升瓶が割られて、破片が突き出ているのもある。その上をはだしで走りでもしたら、大怪我すること請け合いである。(後略)」

(「言葉とゴミ」1979年6月15日「読売新聞」夕刊)

この後、サーフィンの若者がゴミの海でも平気なこと、ゴミを散らかして平気なことを言い、海岸線にゴミ箱を設置したらという提案を行い、「海」や「砂浜」という言葉が死に、たんなる文字と化していると告発する。

「本巻（第一巻）の口絵に揚げたスナップ写真は、今からざっと二十二年前、昭和三十七年五月に鵜沼海岸で家内が撮ったものである。

（中略）

その頃の鵜沼の海は水も砂もまだまだ綺麗なものだった。その昔の白砂青松とまでは行かなくとも、今日みたいに塵芥捨て場然とした海岸ではなかった。私は、現在は当時よりもっと海に近い所に、波打際まで歩いて五分という距離に住んでいるけれども、もうめったに砂浜に出ることはない。この二十年は私から海辺を歩く楽しみを奪った。」（「記憶と回想」『全作品』の余白に）1984年）

果たして、今日、海岸線の美化は向上したのだろうか。昭和40年代以降、環境に対する人々の関心は高くなった。「サーフ'90」という、海との共生、海と環境をテーマとした、大きなイベントもあった。「ビーチクリーン作戦」という海岸美化運動も、年間に何回も実施されている。場所によっては環境美化財団による海岸清掃が定期的に行われている。海岸線はかつての美しさを取り戻しつつあると言えるだろうか。

第五章 阿部昭の交友関係

阿部昭は、いくつかのエッセーの中で、自らの交友関係を語っている。

堤剛・安田謙一郎

チェリストの堤剛と安田謙一郎はフランス語・英語の家庭教師時代の教え子である。

「安田謙一郎は、いまでは堤剛、岩崎洗らの諸氏とともに海外にも知られる故斉藤秀雄門下の若いチェリストたちの一人である。

その安田君と最初に会ったのは昭和三十二年、私が二十三で彼が十三ぐらいの時だった。

そもそもどうして知り合いになったかといえば、それは勿論音楽とは関係がない。近くにいた大学五年生の私が中学生のかれの勉強を見ることになったのがきっかけである。当時私はもう現在と同じ小田急本鵜沼のそばに住んでいたが、安田君の家は反対の江ノ電側の藤ヶ谷というあたりにあった。古い鵜沼の

面影をとどめる松林に囲まれ、庭のはずれの崖下からときおりチンチン電車の通る音が聞こえてくる静かな一角であった。

このアルバイトは実は隣町の片瀬にいたもう一人のチェリストの卵、堤剛君の紹介によるもので、私はその半年ほど前から堤君にフランス語と英語を教えており、たまたま安田君が一つ二つ年上の堤君からチェロのレッスンを受けていたといういきさつがあった。」
(「安田謙一郎」1975年)

堤剛は「予習復習もちゃんとやってあり、全然手がかからなかった。私がいる間は一分といえども怠けたりムダロをきいたりしない。」という優秀な生徒であった。その堤剛に、彼の弟子として紹介されたのが、同じ中学生の安田謙一郎であった。安田謙一郎は「まず箸にも棒にもかからぬ不勉強家であった。」と記している。音楽の才能と学業は必ずしも一致しない。安田はのちに、毎日コンクール大賞、チャイコフスキー・コンクール日本人初の三位など音楽の世界では進歩していく。その後、世界的チェリスト、フルニエの弟子となり、日本を代表するチェリストとなる。安田謙一郎との交友はずっと後年まで続いており、世界各地から見事な手紙をくれることも記している。

宮下啓三

慶応のドイツ文学宮下啓三として紹介されている。「トラーヴェミュンデの石」(『文学界』1982年3月号)にドイツから三個の石の土産をもってきたことを書いている。トラーヴェミュンデはドイツ、リューベックの近くの海岸でトーマスマン「トニオ・クレーゲル」のクレオ少年が歩き回った海辺なのではないかと想像している。

佐江衆一

佐江衆一は同じ作家仲間片瀬に住んでいる。「懐しい顔」(『すばる』1982年4月号)の中に記している。

石田一郎

茅ヶ崎市在住の作曲家。もともと、TBS時代の同僚であった。(「日記のことなど」)

大久保^{ひろみ}洋海

鵜沼在の翻訳家。ルナールの『博物誌』の翻訳の縁で度々訪れている。

(「宝石のような」)

田村隆一

詩人の田村隆一は鎌倉の中を点々と引っ越しするが、阿部昭が訪ねたのは「江ノ電稲村ヶ崎の駅から、はじめ緩やかで終わりは急な、一本道の長い坂を登り切ったところに」ある家であった。阿部昭は「よく腰越鈴伝のカマスの干物などを提げて」行ったと記している。 (『面白半分』1979年12月増刊号)

立原正秋

同じ、小説家の立原正秋が、ある日突然たずねてきたことも記している。当時、立原は鵜沼に住んでいた。

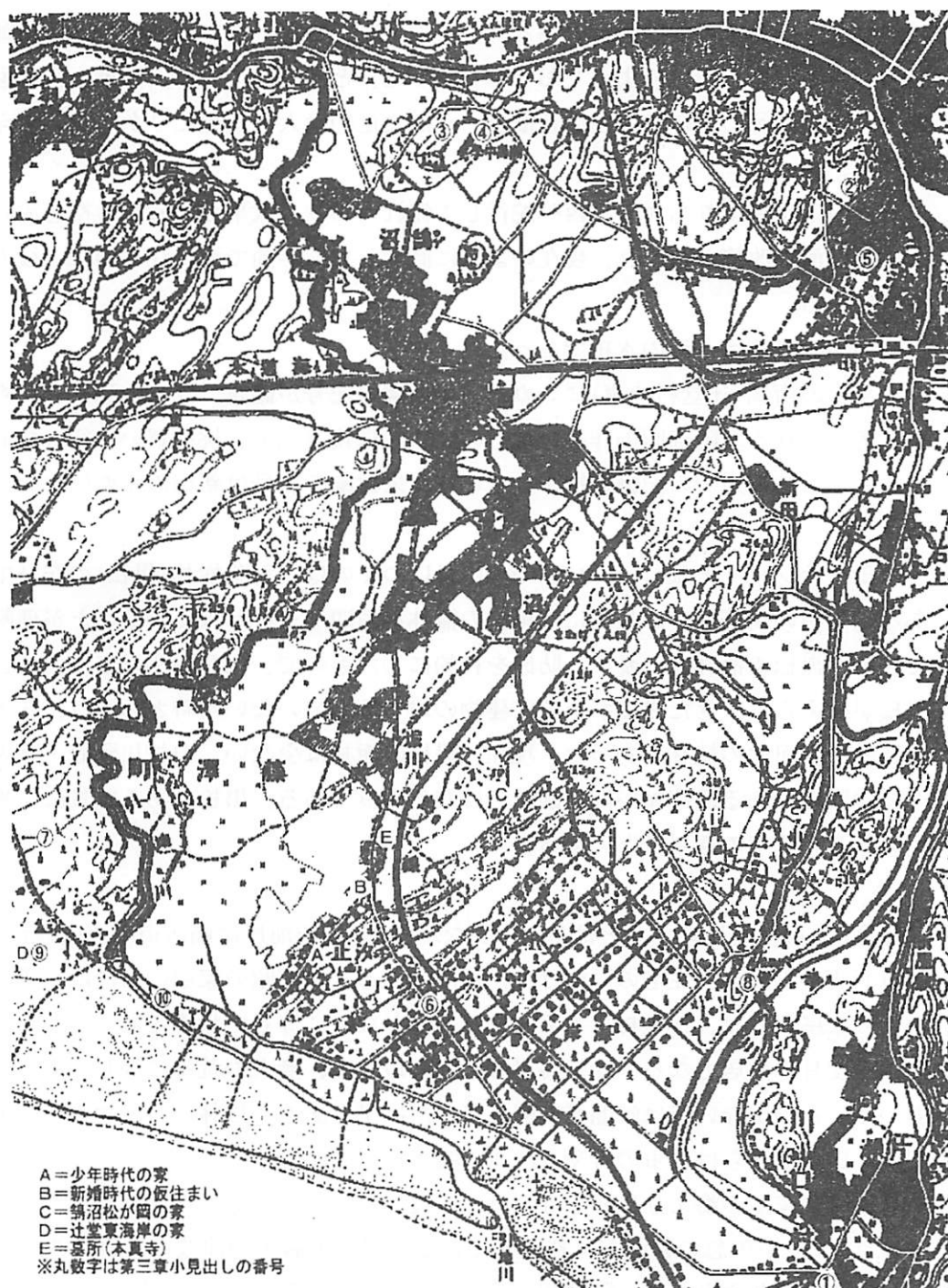
第六章 阿部昭の原風景

阿部昭の幼年期に見た、感じた、鵜沼の姿はどうだったのだろうか。阿部昭の原風景とは、どのような鵜沼だったのだろうか。過去の風景を復元するには、その時代の地形図をていねいに、読図する作業が有効である。地形図から、当時の姿をある程度復元が可能である。

地図は25,000分の1の地形図「藤澤」「江ノ島」(部分)である。大正10年の測図・昭和4年鉄道補入、昭和5年印刷発行のものである。

阿部昭の生年は昭和9年なので、地図は、阿部昭の生まれる14年ほど前の姿であるといえる。この間には、大正12年9月1日の、関東大震災があり、いくつかの変化は予想されるが、阿部昭の幼年期に見た、感じた、当時の姿にもっとも近い地形図であると思う。この地図を利用して、阿部昭の原風景についての復元作業をしてみたい。

鵜沼海岸の最初の家は、鵜沼の集落(旧村)から、原・堀川を通過して海岸(現在の堀川網の所か)へと出る道(浜道)沿いにあった。地図中の「汐止」の辺りと考えられる(地図は右横書き)。



西側は、一面の水田が、引地川まで広がっており、家の背後(東側)にも細い水田があった。家の北には畑がひろがっており、サツマイモ畑やスイカ畑となっていた。家の前の道は、地引き網や貝採集などの漁労に通う道で、早朝、半裸に近

い漁師たちが、家の前の道を海へと向かって歩いていた。幼い阿部昭には、漁師たちの「半裸姿が赤鬼のようでおそろしかった」と回想している。海軍士官の家風と、地元漁師の間には、生活習慣という文化的な大きな隔たりあったと考えられる。

引地川は現在よりも大きく西へ蛇行して流れており、太平台の砂丘の裾を流れていた。河川改修が行われ、現在のように直行して、手前で海に注ぐのは、後のことになる。

引地川の東側は一面の水田であった。

太平台の西側(辻堂村の東)に3カ所、果樹園の記号が確認できる。恐らく、桃畑と考えられる。阿部昭の作品「桃」の中に、母親と二人、桃を買いに行った帰りの太平台の坂道での記憶が描かれている。果樹園の記号は新田の南西側にもある。

水田やサツマイモ畑(スイカ畑)の他に目につくのは、針葉樹林(黒松)の記号である。鵠沼の別荘地や砂丘上には黒松の植林が隙間なく行われていることが理解できる。黒松の植林は、暴風・防砂を目的にしたもので、江戸時代以来、営々と黒松が植えられてきた歴史がある。建物の建て込んでいない当時としては、防風・防砂に不可欠の植林であった。現在、黒松の樹林は少ない。旧村川堅固・堅太郎邸の跡地である鵠沼松が岡公園などに残るのみである。黒松のある風景は、鵠沼のある意味での原風景といえる。

住宅は、現在と比較するとはるかに少なかった。鵠沼海岸に商店街の西の外れ、山口酒店から海へ、住宅の戸数は20戸程度である。阿部昭の家屋の西には、道向かいの家屋以外は、辻堂村まで家屋はほとんどないに等しい状態であった。阿部昭の三度目の住居となる、辻堂海岸3丁目の辺りは、無人の荒野に等しい場所であった。月の出ない夜は暗闇が支配していたはずである。松林からは物の怪の気配が、田んぼからは、虫の音やカエルの鳴き声が響いていた。

阿部昭の家屋の海よりにある寺院は、本真寺(尼寺)である。現在は、鵠沼海岸7丁目1-7、小田急の線路際に移転している。関東大震災の津波の被害に遭い、現在地に移転したと伝う。阿部昭の墓のある寺院である。

小田急線は昭和4年に敷設されている。小田急線開業前の鵠沼別荘地の入り口は、江ノ電(江ノ島電車鉄道)の鵠沼駅であった。阿部昭が来るのは、昭和10年であり、既に、鵠沼海岸駅は開業している。駅ができて、鵠沼海岸地区の開発も本

格的になる。郵便局は天金通り、踏み切りの近く(そばやの反対側)にあった。

大震災前のこの段階では、藤沢駅からのバス通り(高瀬通り・熊倉通りなど)は、まだ建設されていない。震災後に、震災復興の流れの中で、藤沢駅南側一帯が徐々に開発されていく。

地図中の凹地(かつての沼や池)の記号は  の記号である。鵜沼地区の中に7、8か所確認することができる。

阿部昭は、昭和51年に鵜沼松が岡から辻堂海岸へ移った理由について、

「砂地と強風と海鳴りと三拍子揃った荒涼たる空気が性に合っているらしい」と書いている。阿部昭の原風景、三つ子の魂ともいえる風景は、砂地と強風、海鳴りのある風景であると言える。

第七章 阿部昭の土地(場所)論

阿部昭は、「土地の感覚 文体について」で土地・場所の感覚について書いている。

「私自身のことを言えば、四十年近く住んでいる土地のことをさんざん書いてきた。少しずつ、いわばなくずしに、飽きもせず書いてきたわけだが、それは土地の様相や住人の動静を克明に記録してきたということでは全然ない。小説であるからには、一片の土地に乗っかっているひとにぎりの人間のドラマなしには済まされないが、私には「町」や「村」の意識はもともと欠けているらしい。また、永年住んでいるといっても、海が好きだとか住民の気風が気に入っているとかいうことではない。にもかかわらず、私にはこの「土地」以外に書くべきどんな土地もないという頑強な意識があって、身動きができない感じがしている。身裡にあるそのもどかしさを、私はこれまで自分流に「海辺の人間」と言ってみたり、「土地の気分」と言ってみたりしたが、それも幼児から自分ひとりに実感されている事柄の漠たる表現にすぎなかったようだ。では、この土地が私という人間に対してもつ本当の意味は何か?

一人の人間が海辺で幼年期を過ごすことの意味、三十数年間私自身の目に蔽われていたその秘密を明かしてくれたのは、ジャン・グルニエだった。グル

ニエはカミュの終生の隠れた師であったといわれる哲学者だが、私はその『孤島』（井上究一郎訳）や『地中海の瞑想』（成瀬駒男訳）といったエッセーの中に、自分と「土地」との宿縁について思いめぐらすヒントをみつける楽しみに耽ることをおぼえた。例えば、「物のむなしい性格がさらに私のなかで確固としたものになったのは、海に近くて、せつせと海にかよったことにもよる。」

（『孤島』）とか、「私は海を愛していたとは言えない。私は海の力にじっと耐えていたのだ。」（同上）とかいう端的な表白は、到底私にはなし得なかったであろうものの、いつか自分の言葉と錯覚したくなるほどに切実なものになった。

グルニエはまた、海中に長い間何体かの青銅製の彫像、体の一部分は溶けて、残った部分が無数の小さなあばたで被われている、難破船から引き揚げられた彫像について語り、「地下で発見される彫像は手足が切断されているのに対して — こちらは風解している。これらの、彫刻体にも似た一個の精神を想像してみたまえ。それは蝕まれた精神である。もはや創造することはできず、堪え忍ぶことしかできぬ精神である。調和のとれた存在なら、それ固有の則に従って、容易に開花することもできよう。あるいはその腐敗から、なんらかの真実の種子が生ずるかもしれない。ところが、孔だらけで、その中空のお陰でかろうじて自己の存在を保っている海綿から何が期待できよう？ 海綿がいかなる真理を表現できよう？ そこから何が残ろう？ 骸骨 — 永きにわたって宇宙のすべての痕跡の滲みこんだ諸事物の、なんとも名付けられぬもの — の一本すら残るまい。かような精神は、たぶんひとつの合流点、ひとつの交差点、ひとつの数学記号に過ぎないのではなからうか？」（『地中海の瞑想』）と自問する。グルニエは、そこから、生まれながらに自分を取り巻き、自分の裡にも持っている「無関心さ」について説き起こしているのだが、これ以上私が身勝手な引用のあやまちを犯すことは慎みたい。

それにしても、こんなふうに「海」を語った人物、私が年来とらえあぐんでいた「土地」と「文体」との運命づけられた関係を語った人物には絶えて出会ったことがなかったので、私は実に目がさめるような思いがした。ここに到って、私はあの、「土地」を書く、という空々漠々たる言い回しのほとんどナンセンスに近いことに思い当たったというべきだろうか。どこの現実の町や村について書こうと、あるいはどんな非現実の「町」や「村」を紙の上に作り出そうと、私の「土地」は私の文体に夙に刻印されてある — という認識は、苦

いものであると同時に、言いがたい慰めにみちたものでもある。

それゆえに、私がグルニエに倣って、自分は決してこの土地を愛しているとはいえないと言い、ただこの土地の力にじっと耐えているだけと言うとき、それは誇張でも気どりでもなく、忘恩ではさらさらなく、じぶんの人生の出発点をこの水辺に置くことになったさまざまな古い偶然に対する感謝の念に似たものになる。』
(「東京新聞」1973年7月19日夕刊)

『しかし、文字通りの白砂青松のなぎさでは、くる日もくる日も全裸に近い漁師たちが地引き網を悠長に引き、網には魚が銀色にはち切れんばかりで、われわれはよくバケツを提げて貰いに行ったものであること。当時は鰯でも鯛でもいくらでも欲しいだけくれたから、貰いすぎて始末に困ることもあったこと。(雑魚のたぐいは肥料にしかならなかった。)

また、暖かい砂地には西瓜がよく出来るので西瓜畠があちこちにあり(砂上の家屋には夏は蚤も多かったが)桃やトマトもいたるところに生っていて、子供のわれわれは通りすがりにちょいちょいもいではおやつ代りに咽喉をうるおしたが、べつに誰に叱られるでもなかったこと。そのくらい人家が少なく、人通りもまれであったこと。子供たちは履物がないからというよりも、砂の感触をじかに楽しむことに慣れていたために、なにかというところにはだしになって行動したこと……。

「ああ、あの頃はよかったすな…」などと言え、お定まりの感傷的回顧談になって、往時を知らない世代にはただ馬鹿臭く聞こえるだけであろう。私も自分がそんなに老人くさくなつたとは思いたくない。しかし、私は海辺の思い出をむりやり語られるたびに、最後はきまってこう言いたくなるのである。「だから、昔の湘南はいまや私の文章の中にしかないのです」と。」

(『単純な生活』)

場所の概念は、単に平面的、空間的な理解だけでは足りない。人の記憶には、空間だけでなく、時間の概念も入ってくる。同じ場所でも人によって過去の記憶はさまざまである。過去の記憶はきわめて個人的なものである。極端に言えば、場所の概念は「その人の記憶の中にしか存在しない」と言える。阿部昭は、彼自身の鵜沼の姿を小説やエッセーの中に刻印したと言える。それは、阿部昭自身のものであり、同時に多くの人に共有されるべき鵜沼の言霊であると考えられる。

第八章 「単純な生活」の世界

「単純な生活」は阿部昭にとって特別な作品と言ってよいだろう。

1980(昭和55)年、「婦人之友」1月号より1982(昭和57)年6月号まで、全28回(途中2回の休載を挟んで)発表された〈極めてルースな即興的形式の長編〉と規定された作品である。小説としての一貫した物語などではなく、エッセー風、日記風につづられた、著者の日常生活の断片のような作品である。そこには、大げさな身振りなどは全く感じられない、湘南の海辺での「自由きまま」な「身辺雑記風」の生活が描かれている。阿部昭が、その早い晩年(46歳~48歳)に到達した、もっとも、阿部昭らしい自在な作品であると言える。

この作品にも当然のごとく、現実の土地や人間、出来事が度々出てくる。引地川沿いの夫婦の散歩、友人の家の訪問、息子の受験、自らの病気(心臓の不調)、湘南の自然の移り変わり、等々、生活の中のあらゆることが対象となっている。

「夏の過ごしにくさ」に付いて何度か触れている。日本の夏は、一部の地域を除けばどこも過ごしにくい、鵠沼も同様である。海に近いために、湿度が高く、夜間もさわやかな空気にはなりにくい。病後の阿部昭は夏の宵の過ごしにくさを書いている。

「もはや朝の散歩どころではない。日中氣息奄々としている私は、それでも夜になると 多少息を吹き返しはするものの、夜は夜で耐えがたいようではないか。

夕食後、ふたりとも裸みたいな格好で家を出て、海辺の宵闇を歩き回るのであるが、涼風のめぐまれることは稀で、歩くにつれ、なんだかじわじわと毛孔から塩でも噴いてくるみたいだ。夕涼みのはずが、これでは帰ってまた風呂にとび込まなくてはならない。

並んで歩きながら、なにかの拍子におたがいの肘がちょっとでも触れようものなら、おもわず火傷でもしたように、

「熱い！」

と悲鳴をあげたくなるようで、

「おい、もう少し離れて歩いてくれよ」

と邪慥なせりふも口にしたくなる。」

辻堂発のバスで、海沿いの国道134号線を経由して、鎌倉へ向かったこともあった。

長谷の少し先、由比ガ浜通りでバスを降り、古書店（公文堂）に立ち寄ったこと、鶴岡八幡宮近くのカレー屋へ行ったことなどが描かれている。書斎の中の仕事での鎌倉行は、ちょっとした小旅行気分をあげていたのではないだろうか。

「二百メートルばかり歩いて、海辺のドライブウエーに出る。すぐその歩道橋の下から、一時間に一本か二本通る鎌倉行きのバスに乗るつもりである。目と鼻の先に、こんな便利な乗り物があることを、私はつい二、三年前まで知らなかった。で、鎌倉へはいつも電車を何本も乗り換えるなり、遠回りするなりして行っていたのである。

このバスなら簡単だ。座ったまま、しかもほとんど全行程右手に海を見ながら、いつのまにか目的地に着いている。もっとも、こんなことをするのはシーズンオフに限る。それも冬から春にかけて、この辺りの海がいちばん人気がなく、美しい時期に限るのである。

〈中略〉

さて、バスに乗ったら、かならず海側の席にすわること、そうして、ただ海面にだけ目をやるようにして、大人しく運ばれていくことである。――心に決めたかのごとく、わたしはいつもそうする。

たしかに、沖のほうばかり見て過ぎるのが無難である。陸地にはあまり見たくもないものが多いから。毒々しく塗り立てたモーターだの、撮影所のセットみたいなドライブインの飲み屋だの、例の子供がよろこぶマクドナルドの売店だの。

私の子供時代の白砂青松のまぼろしは消えてしまった。どこもかしこもコンクリートだらけになってしまった。マイアミと姉妹都市だとかで、そんな愚にもつかぬ触れ込みで、海岸線をかさぶたのような醜悪な建物で埋め尽くしてしまった。

しかし、海は海で、相変わらずちゃんとそこにある。そもそも何千年か何万年か昔には、この沿岸全体が海の底であったということだ。それならば、いつかまた何百年何千年の後に、どんな天変地異が起って、ふたたびこの一帯が水中に没してしまわぬとも限らない。モーターも、ドライブインも、マクドナルドも……。

〈中略〉

江の島を過ぎ、腰越、七里ヶ浜、稲村ヶ崎、由比ヶ浜と海沿いを走りつづけて、長谷の町並みに入る。

長谷の少し先で降りて、あとはぶらぶら歩いていくこともある。途中に大きな古本屋があるのも理由の一つである。別のある日、私はその店の棚の隅っこに、自分のまっさらな小説集が一冊、三百円という値段をつけられて、いかにもぞんざいに突っ込まれているのを見つけた。

私はいささか胸痛む思いで、こっそり手にとってみた。新品同様なのに三百円か。

なんだかそのままにしておくのは忍びない気がした。預けたわが子を引き取るみたい、引き取って帰ろうかと思った。が、ふっと気が変わった。自分で自分の本を買うのもつまらない。このままにしておけば、どこかの誰かが三百円出して読んでくれるかもしれない。そう考え直して、そのままにしてきた。

— そんなこともあった。」

講談社文芸文庫版『単純な生活』に《著者から読者へ》「散文の橋」として自己解説とも言える文章を書いている。

「この『単純な生活』に限らず、私の創作の大半は或る一時代、一時期の湘南地方のそれごく狭い地域を背景としている」と書き。

「湘南」ブームに対する嫌悪の念を言い。

「その昔の海辺の一田舎町、一寒村から今日のベッドタウン、リゾートへの変貌・発展」について、むしろ、失ったものが大きいと言う。

「失われた緑地の面積、投入されたコンクリートの量、増大してやまない流入人口や車の数」

「白砂青松」は昔語り、「沼や池は」鵠沼の地名に残るのみ、川は「用水路と化して」おり「人心の荒廃俗化、また然り」と記す。

「私のこの『単純な生活』も、作品に不可欠の要素として現実の土地や人間や出来事を素材に用いている。だが、作者の目的はそれらに関する単なる記録や報告、抗議告発にはなかった。まして、海水浴場の波打ち際にまたたく泡沫のごとき「湘南」ムードの流行に投じることはなかった。それだけのものにすぎないならば、風俗の表層をうつろう多くの小説同様、今日もはや読むに堪えぬであろう。」

『単純な生活』は阿部昭が、自らが育ち、成長し、また、生活の場ともした、鵜沼の土地に対する、散文による「白鳥のうた」、「挽歌(レクイエム)」とも言える作品であると言える。

第九章 阿部昭の死と墓

著者生前の最後の刊行本は、講談社文芸文庫版の『単純な生活』であり、その中の「著者から読者へ 散文の橋」が最後となった。前年の1988年には『挽歌と記録』をだしており、いずれも、阿部昭の死を予感させる作品となっている。

既にふれたように、湘南の地の、海は汚染され、海岸線はゴミ捨場と化していた。松林は次々と伐採され、新しい住宅地へと変化していた。そこへ、更に暴走族の騒音が追い打ちをかける。「松林と原っぱ」「砂地と強風と海鳴り」が好きだったと言う、阿部昭の生きる空間はますます狭くなっていた。

「私は海辺に住んでいるので、街の音からは遠い。嵐の前後などは海が鳴るが、ふだんは耳につかない。その代わりに海沿いの国道を往来する車の音が絶えない。ことに深夜、暴走族が通過する際は、百雷一時に落ちる大音響、と形容するも誇張でない。その合間には、パトカーのサイレンや救急車のホーンもまじる。」
(「春の夜」『婦人百科』1986年5月号)

「今宵もか わが寝ねむころ 単車らの 鼠花火の 寄せ来たらむか
戯れうたの一つもひよいと口をついて出ようほどに、湘南の海岸は夏冬を問わず、暴走族の名所である。もはや、風致地区だの何だの言っている段ではない。彼らの夜ごとの祭典が、どのようなものであるか、知らない人には一と晩泊まって行って貰うしかない。

ただでさえ寝苦しい季節に、明け方など耳もとでやられると、それっきり眠れなくなる。海辺の住人の間に、怒り心頭に発するものがあって当然である。」

(『日本経済新聞』「風の音楽」1987年8月9日)

タイトルの「風の音楽」とは、暴走族の出すエンジン音に対してのあきらめと

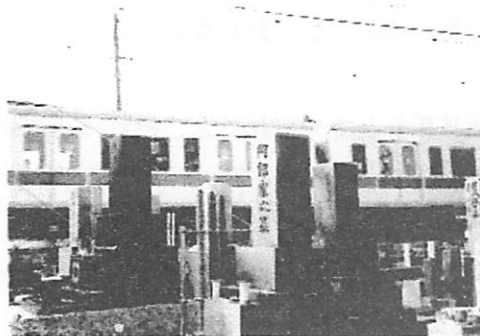
皮肉の言葉である。

阿部昭の死は1989(平成元)年5月19日である。この年1月8日に、元号が昭和から平成へと変更になっている。阿部昭の昭はおそらく、昭和の元号から命名されていると考えられる。阿部昭は昭和の終焉とともに去ったことになる。亡くなった日は、朝まで、「浦島太郎」(同年7月号『群像』に発表)を執筆し、その後、倒れ、藤沢市民病院へ運ばれたが、同日午後零時半に急性心不全で他界している。54歳8か月であった。

阿部昭はその死に際して、一切の献花や弔辞などを断った。遠くから駆けつけた弔問客にも入り口で、引き取ってもらっている。阿川弘之は東京から弔問に訪れて、花輪も何もない、ひっそりとした入り口で、阿部昭の長男と会っただけで引き返したことを、追悼文に書いている。葬儀は身内だけで行っている。阿部昭にとっては珍しくベストセラーになった岩波新書の「短編小説礼讃」の原稿料がそのまま保存されており、それが葬式費用にあてられたと伝う。

最後の文章となった「浦島太郎」には、文芸誌の編集者に「隠遁」と言われたとか、人との交際の煩わしさを述べており、タイトルの「浦島太郎」も自らを自嘲するか戯画化したタイトルと言えなくもない。「昭和一桁世代の心」(『挽歌と記録』)には、磯田光一、前田愛、澁澤龍彦、山川方夫、柏原兵三、野呂邦暢、金鶴泳など、多くの戦中世代作家(昭和一桁生まれ)の早逝が記されており、自らの死についても、予感らしきものがあつたと考えられる。ちなみに、昭和9年の同年生まれの作家には、佐江衆一、吉田知子、池田満寿夫、長部日出雄、筒井康隆、井上ひさしなどがいる。

阿部昭は生前13冊の小説集と、133冊のエッセー集を残した。「阿部昭全作品」が福武書店から、「阿部昭集」が岩波書店から発行されている。



阿部昭の墓は、鵜沼の本眞寺(地元では尼寺と呼ばれている)にある。既に父や母、長兄が眠っている場所である。小田急江ノ島線が本鵜沼から鵜沼海岸へと大きく左へカーブする右側にあたる。線路沿いにあるので、電車の窓から、いつ

でも確認できる距離である。「子供の墓」に描かれた墓地といった方が伝わる人も多いと思われる。阿部昭の墓は毎朝、何百人、何千にももの通勤、通学の人の視線にさらされており、にぎやかな場所と言える。墓石には「崇徳院昭誉文学居士」と戒名が刻まれている。

あとがき

「阿部昭の鵠沼風景」とは、阿部昭の原風景としての鵠沼のことである。

阿部昭は多くの小説、エッセーの中で、自らが育ち、生きた鵠沼のことを表現した。

彼の作品は、鵠沼に対する一種のオマージュ（讃歌）として描かれている。

「子供の墓」は父母の眠る場所について、いつか自らが埋葬されるであろう場所について。「鵠沼西海岸」は長兄へ捧げるレクイエムとして。「桃」「沼」「川」「自転車」などの作品も同じく、鵠沼に対するオマージュとして読むことも可能である。

しかし、1970年代後半には入り、鵠沼は大きな変化を迎えるようになる。

海はゴミで汚染されるようになる。

川はドブ川と化す。

松林は伐採され、砂原は住宅地となり、景観は破壊される。

このような環境の変化に対して、阿部昭は「自らの精神が蝕まれ海綿状に空洞化」するような悲しみを発している。子供の時の記憶が、次々と失われていく現実に対して、「だから、昔の湘南はいまや私の文章の中にしかないのです」というように、金切り声に近い叫び声をあげている。愛することは、いつか裏切られることにもなる。

「単純な生活」は、鵠沼に対する一種レクイエム（挽歌）である。

鵠沼に対する愛は既に、彼の「文体に刻印されている」と言える。

オマージュとレクイエム（讃歌と挽歌）。この二つを書き終えることにより、阿部昭は自らの使命を果たしたと実感したのではないだろうか。

阿部昭の残した文章は、「鵠沼の言霊」となっている。

（しまもと かずや 神奈川県立茅ヶ崎西浜高等学校教諭）

阿部 昭 略年譜

年 月	事 項
1934 9 22日	広島県広島市白島(現中区白島)に生まれる 父信夫(海軍少佐)、母ハルの三男。長兄=亥之助、次兄=新
1935 春	父=信夫の海軍省転出に伴い神奈川県高座郡藤沢町鵠沼に転居 12 鵠沼字下鰯(鵠沼海岸3丁目)に転居
1939 4	片瀬乃木幼稚園(現在の湘南白百合学園幼稚園)に入園
1941 4	藤沢市立第一国民学校(現在の藤沢市立藤沢小学校)に入学
1945	父、次兄、復員
1947 4	藤沢市立第一中学校に入学
1950 4	神奈川県立湘南高等学校に進学
1953 4	東京大学文科二類に進学。一時演劇サークルに所属 8 鵠沼字中岡(鵠沼松が岡5丁目)に転居
1954 6	長兄=亥之助、死去
1955 4	仏蘭西文学科に進む。単位不足等の理由で2年留学
1956	堤 剛(後のチェリスト)の家庭教師となる
1957	安田謙一郎(後のチェリスト)の家庭教師となる
1959 4	大学を卒業してラジオ東京(現在のTBS)に入社
1960 9	NHK芸能局洋楽部の小野玉枝と結婚。10か月ほど実家近くの借家に住む
1961 5	テレビ編成部運行課へ異動 6 実家に増築した新居に戻る
1962 1	半月ほど病欠、以後も4月まで断続的に休む 6 応募小説「子供部屋」で第15回文学界新人賞を受賞
1963 1	長男=陽一郎誕生
1964 5	二男=龍二郎誕生 8 自ら希望してテレビ報道部へ異動
1965	「冬物語」及び「幼年詩篇」を『文学界』に発表
1966 9	テレビ局からラジオ局へ異動 「月の光」及び「手」を『文学界』に発表
1967 8	父=信夫、死去

- 1967 「東京の春」を『文學界』に発表
- 1968 「未成年」を『新潮』に発表。以後『文學界』以外からも依頼増加
 12 三男=三郎誕生
 12 処女短篇集『未成年』（文藝春秋社）を刊行
- 1969 「鵜沼西海岸」を『群像』に発表
- 1970 4 『大いなる日』（講談社）を刊行
 12 長編「司令の休暇」を『新潮』に発表
- 1971 「明治四十二年夏」を『群像』に発表「指令の休暇」の反歌的作品
 4 『司令の休暇』（新潮社）を刊行
 「一日の労苦」を『文藝』に発表
 10 31日、TBS（在職12年7か月）を辞して専業作家となる。
- 1972 2 『日日の友』（河出書房新社）を刊行
 2 『新鋭作家叢書阿部昭集』（河出書房新社）を刊行
 3 辻堂東海岸に仕事部屋を設け、自転車で往復
 3 短編連作の第一回として「自転車」を『群像』に発表、以後18編を連載
 11 評論随筆集『あの夏あの海』（河出書房新社）を刊行
- 1973 3～8月、雑誌『群像』に短編小説を連載
 4 『千年』（講談社）を刊行
 11 『千年』で第27回毎日出版文化賞〔文学・芸術部門〕
- 1974 11 『無縁の生活』（講談社）を刊行
- 1976 3 評論随筆集『子供の秘密』（河出書房新社）を刊行
 5 辻堂東海岸の仕事場に一家転住
 7 『人生の一日』（中央公論社）を刊行
 絵本『こんなものひろった』『大きな木の下』（婦人之友社）を刊行
- 1977 3 『人生の一日』で第27回芸術選奨文部大臣新人賞
 10 「桃」が[Peaces]としてJay Rubinの英訳でKnoph社刊行
- 1978 3 『過ぎし楽しき日』（新潮社）を刊行
 4 『阿部昭全短編・上』（講談社）を刊行
 5 『阿部昭全短編・下』（講談社）を刊行
- 1979 4 評論随筆集『父たちの肖像』（中央公論社）を刊行
 6 連載読み物「言葉ありき」を『文藝』に12篇を1年連載
- 1980 3 『海からの風』（作品社）を刊行

- 1980 3 「自転車」が[自行車]として中国訳で中国で刊行
4～5月、初の海外旅行(フランス)
6 連載読み物「十二の風景」を『文藝』に12篇を1年連載
11 『言葉ありき』(河出書房新社)を刊行
- 1981 1 随筆集『みやげの小石』(作品社)を刊行
2 絵本『こんなもののひろった』(婦人之友社)を刊行
3 絵本『大きな木の下で』(婦人之友社)を刊行
3～1982.6、「単純な生活」を『婦人之友』に28回連載
4 心臓の不調で9日間入院
9 『十二の風景』(河出書房新社)を刊行
11 母=ハル、死去
11 評論随筆集『散文の基本』(福武書店)を刊行
- 1982 4 「桃」が[Oszibarack]としてCzina Erzsebetのハンガリー語訳で刊行
8 『単純な生活』(講談社)を刊行
9～1983.8 「変哲もない一日」を『文藝』に24回連載
11 『まどろむ入江』(福武書店)を刊行
- 1983 4 長編小説「緑の年の日記」を『海燕』に11回連載
- 1984 2 『阿部昭全作品』全8巻(福武書店刊)
4 「まどろむ入江」が[A Napping Cove]として英訳
5 『緑の年の日記』(福武書店)を刊行
8 『変哲もない一日』(河出書房新社)を刊行
- 1986 8 評論集『短編小説礼讃』(岩波新書)を刊行
- 1987 4 『阿部昭十八の短篇』(福武書店)を刊行
9 『エッセーの楽しみ』(岩波新書)を刊行
- 1988 4 『挽歌と記録』(講談社)を刊行
- 1989 5 辻堂東海岸にて55歳の若さで病死(急性心不全)
墓所は夢想山本真寺(浄土宗)【崇徳院昭誉文学居士】
- 1990 10 『猫に名前をつけすぎると』(福武書店)刊行
- 1992 1 『阿部昭集』全14巻(岩波書店刊)

【エピソード】

- ◆芥川賞候補になること6回(芥川賞史上最多記録)
- ◆阪神タイガースと阪急ブレーブスのファンだった。

はす池 断想

吉田敏平（はす池の自然を愛する会）

「鵠沼」第85号の【蓮池特集】のⅡに桑原玲子さん（愛する会会員）が、「会」の運動経過を書いているので、その以後のことをたどってみます。

1998(H10)年 市民に開放されていた広場にブルドーザが入り、「鵠沼女子高校グラウンド」の看板が突如建ったこと。

そして次ページに「一信じて待っていたのが馬鹿だったのしらー」と会員一同身にしみて感じたことを述べています。

つまりそれは、

「請願が採択されたから市はその方針で進んで行くと思っていたら、それはおお間違いだと気付いたわけです、絶えず市の担当部署に働きかけ、そして市民の声として絶えず「会」は発信していなければならないのだ」です。

勿論、「会」は掃除もし（〇氏の掃除は特筆もの）、公園愛護会も兼ね、こつこつと動いていた。

反省の結果は、約10年間怠った「ニュース」の発行であり。3度目の請願への取り組みだった。

市政は葉山市長から山本市長へと代わり2年目だった。

鵠沼女子高校の校長は、はす池が多くの方々に愛されていることを承知し、池を埋めるなどする意図はないと言明しながらも校内誌では、地主との接触を進め、購入した800坪を基にグラウンド拡張の意図を隠さなかった。一方市長は従来の方針（二つの池と広場を公園にする目的で借地を継続する）を認めていた。私たちには地主（複数）の考えも市の方針もまだ決定的ではない。時間はまだある、と思われた。出来ることはしよう。

「会」は市長陳情と共に請願を準備し署名は4500筆となった。しかし市議会の最大会派らの動向は、20年前とは様変わりして、価値観が市民要求より経済利益偏重へと移っていた。

頼みの「みどり基金」は丁度底をついていた。鎌倉で成功したトラストも尋ね

たが先立つものは金である。市といえど借地は、地主の意向次第ともいえる。そこで公園課長に話し込むが、顔をぴりぴりさせて、話をそらしてしまう。公園開きをした時とは、これも様変わりだ。

出来ることはまだある。自然環境上貴重な存在と証明できれば、世論に訴え打開出来るかも知れない。そこで、はす池の自然環境上の状態を正確に把握するため調査をお願いし、日大の吉原教授が快く引き受けてくださり、第1回調査が実施された。また、自然環境懇話会の先生方の助言に展望を得、更に藤沢メダカの学校をつくる会の先生方、特にはす池の近くに住むW先生ご夫妻は進んで「会」の会合に参加され、助言を下さった。その一つに西行法師の事跡の研究結果(*)がある。これは文化的価値を開くに違いない。

ブルが入ってから5年目、2003(H15)年9月学校と藤沢市は「グランド造成説明会」を開いた。

原案は広場を土盛して、「周辺より高いグランドを造る。池は8割を埋めてグランドにする」である。

出席した周辺の水害被害者は、「これでは広場にはいる筈の大雨の水は我々の家に押し寄せる」と考え、即座に抗議した。2回の説明会は立ち往生してしまった。

水害被害者の裁判も辞さない行動と「池を埋めないで！」署名の6000筆は、交渉の場をつくらせた。市(N助役ら)、学校(学校長ら)に対し、「会」、水害被害者、署名推進者らは連帯して談判を重ね、助役は決断し最終結論を提示した。12月だった。それはグランドは土盛りを止め、面を周辺家屋と略同一の高さに下げ、第一はす池の8割は自然のまま残し、市営の公園とする。と。

設計変更をさせた力のひとつ、はす池を埋めないで！の署名6000筆の最大の推進者はPTAの母親たちであり、そういえば「会」の出発も2世代前のPTAの役員同士。力の基は、はす他が一貫して子どもの良い遊び場だったこと、母親がPTAで民主主義を身につけたことによるのではないか。その上メダカの学校の先生方は、また小中学校の先生方でもある、暖かく見守ってくれたに違いない。この「グランド造成説明会」を契機に立ち上がった水害対策の要求は、より根本的水害対策を要求したので、昨年秋市は、貯留管工事の第3番目をはす池一帯とすると議会答弁で明らかにした。

市民要求に応じ
市が20年間2億円
を越える借地料を
払っていた広場は
今グランドとな
り、高いフェンス
に囲まれて緊急避
難所として役立ち
そうもないが、広
がった「桜小路公
園」は二つの池を
擁し、「鵠沼の原
風景」として唯一
の場所となった。



第一はす池の公園化工事 2005. 3. 21

それは住宅地のド真中にミニではあるが自然を残し、この大人が「ホッ」と感じ憩う空間は、これからも長く、子どもが自然に触れ、ザリガニやオタマジャクシを追いかける遊び場であり続けるであろう。

衰えた「ハス」の再生も少しずつメドがつき、月1回の掃除は時にご近所と有志の参加で35年の歴史を刻む。昨年、アゾラ・クリスタータという池面を覆い尽くす浮き草の騒ぎに、ご近所だけでない写真愛好家、少年期はす池を遊び場にした方々が駆けつけて下さっている。市公園みどり課も本腰である。新しい息吹だろう。誰いうとなく「はす池」と名付けられたこの自然は、今春を迎えようとしている。

(よしだ びんぺい)

*「蓮池に放流を目指して」教育文化センター菊池久登先生

*「淡水魚の独立王国」は江ノ電新聞 (H15, 2, 1号)

御所見直好氏随筆「池塘春草の夢 甦れ桜小路公園の自然」の表現を借用した。

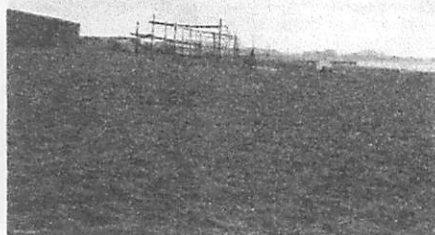
*「西行法師の事跡」は「鵠沼」第85号の特集蓮池のⅠ、川袋低湿地形成と蓮池の変遷(序説)の21ページにW先生は歌人杉敏介の研究を紹介、且鵠沼女子高校の第2回グランド造成説明会の席上、西行法師の「心なき身にもあわれはしられけり、嶋立つさわの秋の夕暮れ」はこの鵠沼はす池のあたりで詠んだことを紹介した。

『湘南アカウミガメ物語』

会員 宮戸 光

《始めに》

『湘南の皆さん！ご無沙汰しておりました！』と、言わんばかりにアカウミガメが、30 数年ぶりに産卵・孵化をした。産卵は昨 2008 年 6 月中旬、場所は引地川西岸・堀川網前辺り、個数は 134 個であった。



《産卵の背景》

神奈川県内では、1960 年代から 70 年代にかけ、静かで人の少ない、石ころで覆われた酒匂川河口付近などで、産卵する事が多く報告されていたが、現在ではさっぱり状態であった。

その理由として、本来カメの産卵は孵化のしやすい砂浜で行われるようだが、昨今の環境の変化によって、産卵場所が変化したそうである。

ダム建設による土砂の流出量の減少や、波による砂浜の浸食、夜遅くまで砂浜を照らす照明、砂浜への人の出入りなど、産卵可能な砂浜がなくなったことがあげられる。

もう一つの理由は、なんといっても海や砂浜のごみの量である。今回産卵がなされたと言うことは、やっとカメにも認められるほど、湘南海岸がきれいになったという証である。

《漁師の知恵発揮》



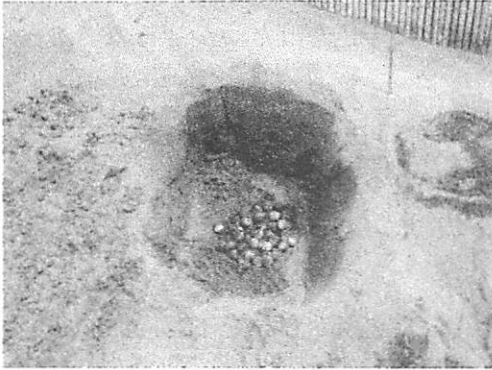
今回孵化したのはアカウミガメで、通常ウミガメが孵化する場合、波打ち際からの距離と高さの違いで、その孵化率は大きく変わるそうである。

通常アカウミガメの平均孵化率は、数十%と言われている。

しかし今回は 90%以上の卵 120 個が孵化

し、学者の方もびっくり仰天。

実はこの孵化率の裏には、地元の漁師の知恵が隠されていた。



漁師の話では、カメが産卵した場所は、波打ち際に近く、大潮などの満潮時には波をかぶってしまい、卵が腐ったり、海に流されたりする可能性があるそうだ。

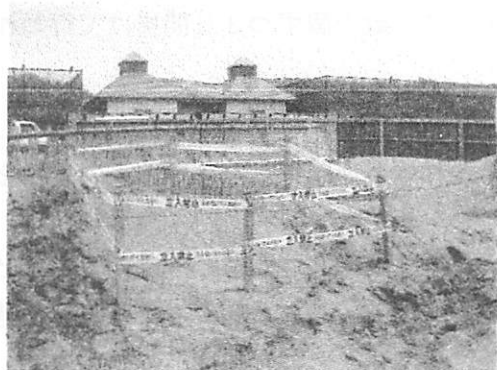
今回の産卵は、様々な環境の変化によって、本来持っている本能を鈍らせ、急ぎ・慌てさせたと考えられている。

その結果、波打ち際から程近い場所に産卵をしたそうである。

また野性の本能で、産卵した場所を天敵等から発見されないよう、産卵場所の周辺をくるくると歩き回るようだが、今回の場合は、砂浜の一部にしか跡が付いてない事に漁師が気づき発見された。

漁師が産卵した卵を慎重に掘り起こし、孵化しやすい環境、すなわち高台の砂浜へ移動させ、見守った事が孵化率を大きく増加させた、と学者は言っていた。

産卵から孵化までの約2ヶ月間、卵が暖まり過ぎたり、冷え過ぎたりしてはいけないそうだ。一定した砂浜の温度が、生命誕生に最も重要であると言える。



《ついにカメ誕生！》



産卵から約2ヶ月程経った、8月13日の早朝のことであった。漁師からの電話によって慌てて誕生の場に駆けつけ、カメラを構えた。

小さな円らな目をパッチリと開け、卵白のような透明状のものと砂が、小さな体いっぱいにつ着したまま、我先にと砂の中から現れる。

孵化した子ガメの体長は、僅か4~5センチで手のひらに乗るサイズであった。



試しに手のひらに乗せてみると、元気いっぱい手足をばたつかせるのであった。

生まれて間もないにもかかわらず、あれだけ歩ける様には只々感動した。甲羅は固く、その容姿は大人ガメと変わらない。

孵化した場所から一心不乱に海に向かって歩いている子ガメを、いたずら心で海と逆の方向に体に向けてみた。がしかし、生まれたばかりであっても本能なのか、海の方がしっかりわかる様で、くると向きを変え、ひたすら海に向かうのであった。

カメの孵化は、一時に全ての卵が孵化するものと思っていたが、今回の孵化のように、数十個ずつ3日間掛けて行われることが通例のようである。

《いよいよ大海原へ》

どれほど歩いたろうか。長い^{みちのり}道程をしっかりと歩き、いよいよ海に到着。

この道程にも危険がいっぱい。鳥などの餌になってしまうものや、ちょっと遅れて誕生したもの、走行が遅いものは、熱い砂浜で焼けてしまうのである。



やっとの思いで大海原に到着だ。スムーズに迎え入れてくれると思いきや、殆どの子ガメが波に戻されてしまうのである。

中にはひっくり返ってしまうものもあり、非常に危険な状態がひたすら続くのである。



大自然とはこう言うものである。仲間から遅れをとらないように起き上がり、一心不乱に海を目指すのであった。

戻されても戻されても、生きていく為、生まれたばかりの子ガメは、懸命に大海原に向かっていった。

《伝説ではなかった》

今回アカウミガメが孵化したが、同日、親ガメらしきカメが沖合いの網に引っかかったそう。

「親ガメは、子ガメが孵化をする時期になると、浅瀬に迎えにやってくる」と言う、伝説のような話があるようだが、伝説でない事が証明された。

沖合いでの、親子の再会を願うものである。

《再会の日まで》

今回誕生したアカウミガメだが、ずっと日本近辺にいるのではなく、北米や中南米メキシコ辺りまで回遊しながら成長するそう。危険な世界旅行の始まりである。



我々の手で更に環境を良くし、今回孵化したこの子ガメ達が30年後、親ガメとして湘南の海に戻り、次の世代を誕生させる事を願うばかりである。

何はともあれ、多くの子ガメが孵化し、一生懸命海に向かって歩く様には、私も感動すると共に元気をもらった。

子ガメたちよ！また会う日まで！！

写真撮影も筆者（みやと みつる）

* * *

アカウミガメ : *Caretta caretta* ; loggerhead

カメ目、ウミガメ科。甲長1m。甲は大きく扁平で、背甲は赤褐色を呈する。甲板の数には変異があるが、普通は中央板が5~6枚、中央側板が5対あり、いずれも敷石状に並び重なり合わない。性質は荒く、雑食性で、魚類、甲殻類、軟体動物、藻類などを食べる。

太平洋、インド洋、大西洋などにひろく分布する。日本本土に上陸して産卵するウミガメは本種のみである。

(出典:ブリタニカ国際大百科事典)

宮崎弥代子さんの

「大正・昭和の鵜沼の思い出」

運営委員会企画担当

昨年 12 月の例会でのお話は
大正 12 年から鵜沼に住まれ
宮崎通りの土地提供者・宮崎家
に嫁がれた宮崎弥代子さんに
「大正・昭和の鵜沼の思い出」
を、お話をいただきました。

お話は提供頂いた貴重な写
真をスクリーンに映し、有田裕
一会員との対話形式で進めら
れました。93 歳とは思えない若々しさと、ことこまやかに当時のことを思い出し
て話されるので一時間以上に及ぶお話は、とても楽しいものでした。



本鵜沼仲東に門田邸新築

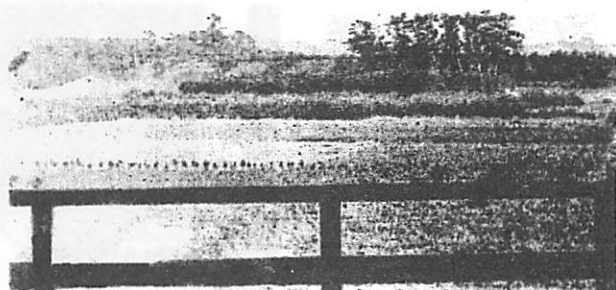
宮崎弥代子さんは大正 5 年 2 月、東京・麻布で門田家に生まれました。父親が喘息
のため鵜沼在住の知人・高松医師の勧めで、大正 12 年 1 月に家族ともども鵜沼
納屋（堀川）の山口貸家に転居してきた。父君は程なく本鵜沼仲東に土地を求め

自邸の建築にとりかか
り、6 月には二階建て
の門田邸が完成した。



新築の門田邸。背後に高松家の大きな松が見える。

新築の門田邸の二階から東方を望む。松が生えている丘が高松山で、その左続きに桃畑があった。奥は片瀬山。この頃、人家はまったくなく、まだ小田急線も開通していない。後に写真の右手方向に、本鵠沼駅が出来ることになる。



門田邸からの眺め

関東大震災

新築した自邸に入居後、わずか3ヶ月で関東大震災（大正12年9月1日）に遭遇し建物は全壊した。「地震が来たとき、お膳の下に逃げ込んだが、うつぶしたまま畳ごと突き上げられた。地割れがして水が噴出した」と、震災時の恐怖を弥代子さんは振り返る。後片付けの手伝いに、土浦から祖母がきた。



関東大震災で全壊した門田邸。左より兄(小四)、祖母、母、弥代子さん(小二7歳)
9月下旬撮影

震災直後、一家は隣の大倉家の大工小屋を借りての避難生活となった。大工小屋の窓は簡単なハネ上げ式の開閉であった。

鵠沼小学校に在学中の弥代子さんは、麻布の祖父の家に引き取られ麻布小学校に通うこ

とになり一時、鵠沼を離れた。この写真は弥代子さんが、これから麻布に出かけようとしているときに撮影された。



少女時代

引地川の一番河口に近いところに粗末な丸太橋が架かっていた。増水のたびに流されては架けかえられていた。「鵠沼小学校の男子は皆、裸足で木綿の着物、女子は着物に前掛けていたのが、印象的だった」と弥代子さんは話す。



1920(大正 9)年、湘南中学(現：湘南高校)が設立された。未整備のグラウンドに家族でピクニックに出かけた。

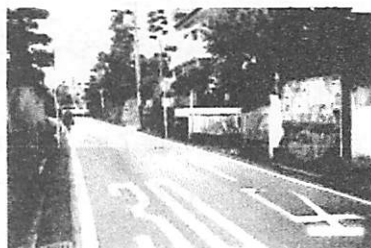
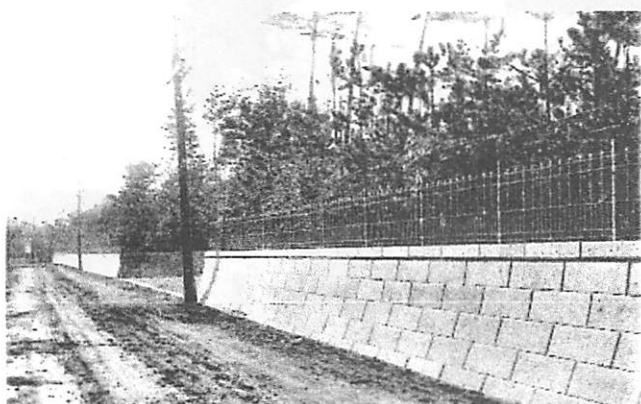


門田家から宮崎家へ

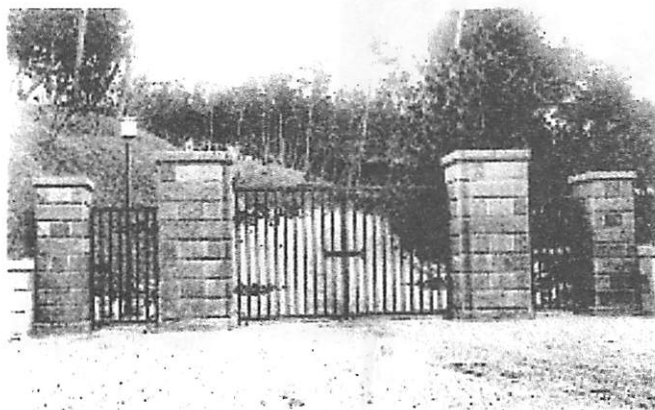
弥代子さんは昭和 14 年に宮崎寛正氏と結婚し、現在の鵜沼桜が岡 4-5 に義父の宮崎寛愛により建てられた宮崎邸（昭和 2 年完成）での生活が始まる。

宮崎寛愛は北海道開拓で成功し財を成した人で、このような豪壮な邸宅を構えていた。

宮崎邸の石垣と正門

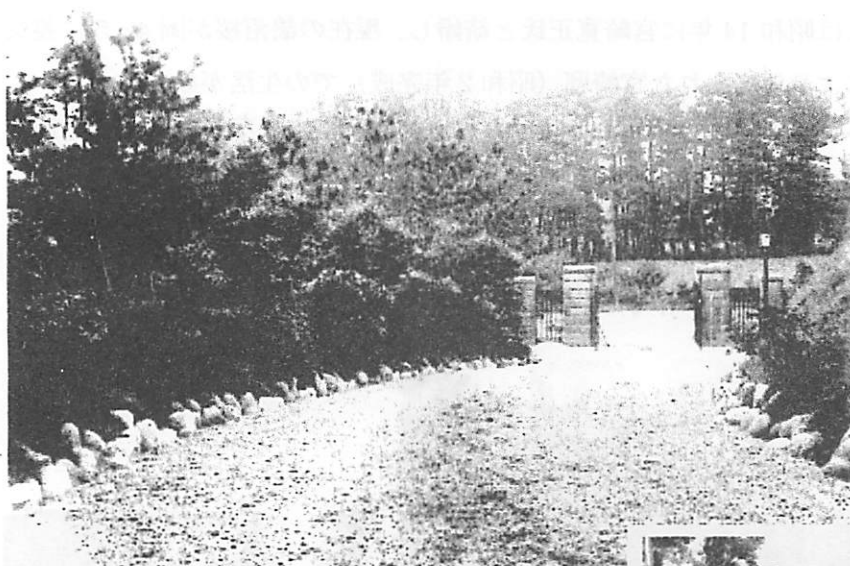


宮崎邸の石垣が続く道路は未だ舗装されていない。この道路は宮崎家が土地を提供したもので「宮崎通り」と呼ばれている。写真右は現在の様子で高根・藤沢間の江ノ電バスが走っている。



当時の宮崎邸の正門で奥に母屋へのアプローチが、ゆるく登っている。写真右は現在の様子で、ここに高瀬通りバス停がある。

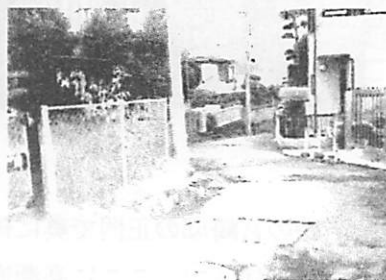
邸内アプローチ



邸内アプローチから正門と外の通りを望む。
写真右は現在の様子で、かつてのアプローチは、
そのまま道路になっている。

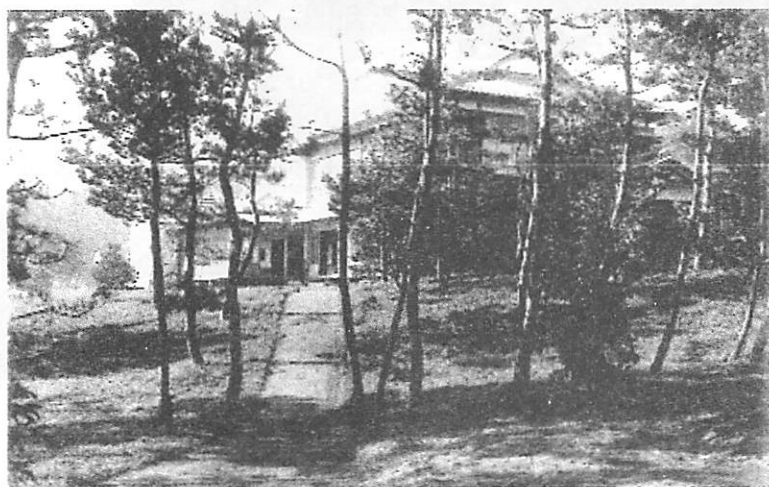
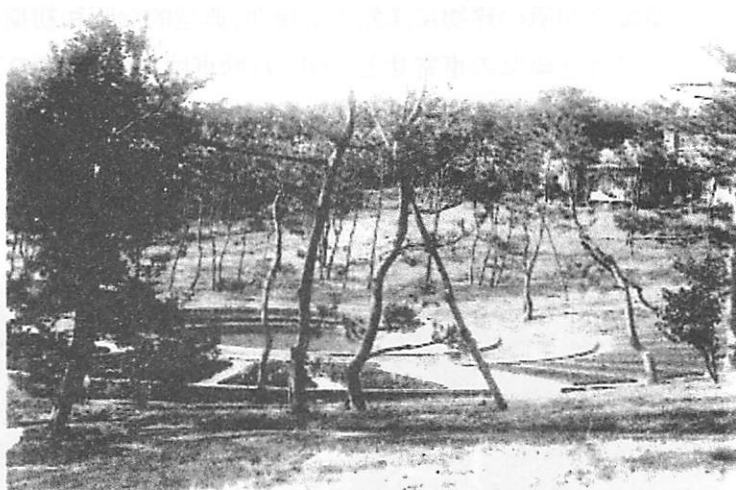


さらにアプローチをのぼり、母屋近くから正
門方向を望む。写真右は現在の様子で道路の両
脇には住宅が立ち並んでいる。



広大な庭園

一万坪に近い敷地の庭園には噴水があり、小道が続く。邸内は、どこをみても松林である(写真上)



庭園から母屋
(中)とテニス
コート(下)を
望む。



玄関と室内

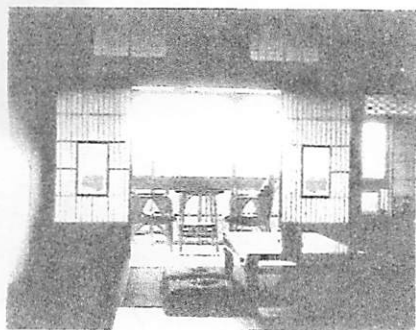
宮崎邸は和風の建物に洋館の応接間、典型的な昭和初期の建築スタイルである。写真(下)は宮崎邸の車寄せと玄関。自動車は1930年代のフォード。戦争中、宮崎氏はこの家屋敷を手放された。



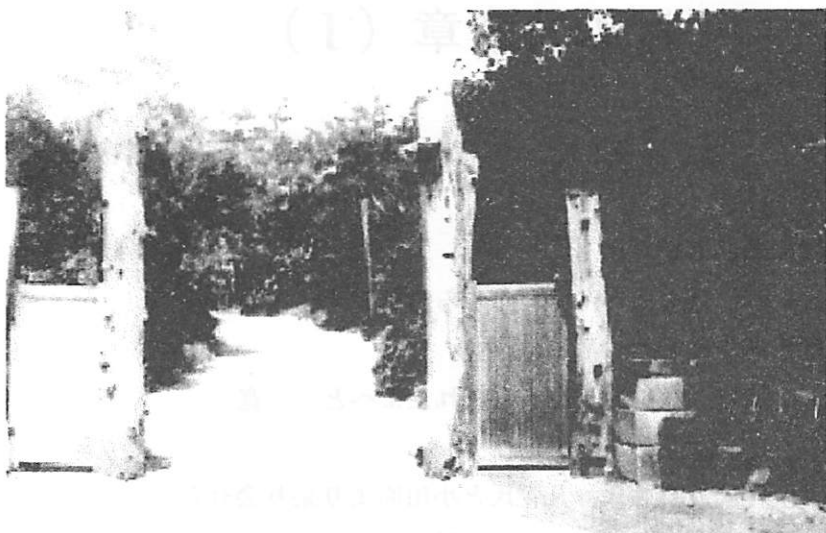
その後、敷地は開発され、いくつもの住宅が立ち並んだが、母屋は現在も安斉邸(右)として残っている。



写真(上)は客間の床の間と違い棚。(右)は二階の和室。高台の二階からの眺めは、さぞ素晴らしかったであろう。

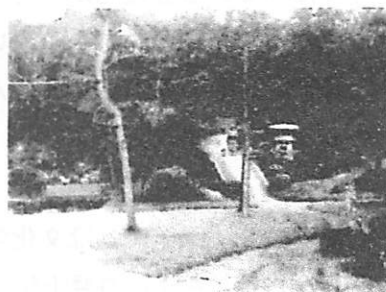


旧大給邸を住まいとしていた宮崎寛愛



現・鵜沼桜が岡の宮崎邸が完成する前の大正8年から昭和2年までは、旧大給邸（現・鵜沼松が岡4-6）が宮崎寛愛の住まいであった。

写真(上)が正門で、湘南学園へ続く通りに面する旧大給邸の石垣(右)。現在もこの大谷石の石垣の一部が残っている。旧大給邸の庭園(下)



☆大給家は鵜沼海岸別荘地の開発にとって、欠かせない存在であった。大給家については会誌『鵜沼』に何回か掲載—「鵜沼松が岡の開発と大給家について」(第88号)「大給子爵家こぼれ話」(第94号)など。

くげぬま断章（Ⅰ）

山上 英男（鶴沼海岸在住）

砂の山天城の頭あしがらに

よそへんほどのしら雪をおく 晶子

まさぐれば手をすべりつつ砂の云ふ

な泣きそ泣きそ忘れたまへと 寛

私ども二人、伊作氏、真藤氏、凡骨氏と小田原より来り会せられし白秋氏
と二日の冬ごもりをいたし候… 鶴沼にて 与謝野寛、晶子

これは大正九年十二月十日付、佐渡の渡辺湖畔宛書簡である。

今から 90 年前の鶴沼に残る小さな文学史的足跡…詩歌でつながる与謝野寛（鉄幹）・晶子夫妻の交友風景が垣間見えるささやかな資料。

こんな断簡でも、かつて晶子の歌集にふれたり、新詩社の機関誌『明星』に集った詩人たちに関心を持ったこともある私にとっては面白い。

この冬の日、たった二日だが、大正デモクラシーの一翼を、今それぞれの分野で担っている者たちが「冬ごもり」と称して集っている。

「…氏と二日の冬ごもりをいたし候」という言葉には、親しい仲間とひとときを過ごす、その温もりを楽しんでいるふうが見えてこないだろうか。



書簡中の「伊作氏」は文化学院の創設者として知られる西村伊作である。

この「冬ごもり」の翌十年（1921 年）には、寛・晶子も携わって同学院が創立されているから、鶴沼の海からの眺めを歌にしながらも、学院のあるべき精神と将来といったものを語り合ったかもしれない。

伊作の叔父は大逆事件で処刑された和歌山新宮の医師大石誠之助である。天皇暗殺を企てたという、時の政府によるこのフレーム・アップは、多くの知識人に

衝撃を与えた。

寛と晶子は『明星』派詩人の一人であったこの大石の救出に努めた。新詩社同人の石川啄木はこれを契機に「全精神を明日の考察に傾注しなければならぬ」という決意をした。

十八歳の佐藤春夫は同郷の大石ドクトルさんの処刑を、ただちに「愚者の死」という詩に書いた。逆説と反語の詩句で、その死に慟哭した。

十代の終わりに日露戦争に反対し非戦論を唱えた伊作が、この大逆事件後の冬の時代を耐え、その中から芽生えてきた大正デモクラシーに呼応して、教育の分野で自由主義の翼を広げていったのはまさに必然だったのではないか。

建築家でもあった彼は、客間中心の封建的な住居から、家族のだんらんを大切に考えた居間中心の住宅を設計し、日本人の暮らしの中に広げていった。

伊作もこの「冬ごもり」の折りに歌を詠んでいる。

砂の上に家をば建てて住はんと

する人のため絵図をつくらん

砂上に家を建てようとする変わり者は誰？ その変わり者に、私は図面をひこう、という歌だろうか。みんなの屈託のない笑いが聴こえてくる。

その笑いのむこうに、黒松の林がつづく砂地の鵠沼風景が目に見えた。



小田原からやってきた北原白秋は、このころ離婚のごたごたもあったが、児童雑誌『赤い鳥』に童謡をさかんに発表していた。

周知のように『赤い鳥』は、鈴木三重吉が当時の日本の児童文化の低俗さを嘆き、また国家の要請に沿った教訓説話や忠君愛国の読み物ばかりが与えられる教育の現状を憂いて、その人生の後半生をかけ、こども本来の言葉を取り戻させようと発行した児童文学誌である。

そこには、こどもを一義的に美化する三重吉の児童観に問題がないわけではなかったが、それをこえて大正デモクラシーのすぐれた良心の結集がはかられ、芸

術のかおりたかい児童文学が創作されていった。

大正がすでに遠かった私にも、白秋の童謡は身近にありつづけた。

暮れりや、砂山、

汐鳴りばかり。

すずめちりちり、また風荒れる。

みんなちりちり、もう誰も見えぬ。

私にとってこの情景は、いつもくげぬまの海であった。

そして、人生のそれとしても響いてくるような寂しさが、この童謡のなかにはあって…だから今だって心うたれる。

この「二日の冬ごもり」では、白秋もずいぶんとくつろいだのだろう。

骨なきもの みみず なめくじ 飴にかわ

豆腐 椎たけ こんにゃくのいも

こんな歌をつくっている。やはりここでも皆どっと笑ったにちがいない。

90年後の私も負けずに笑った。



寛も晶子もこの日、友情のぬくもりの中で息を抜いた。

この時期、寛は別の手紙で『明星』復刊の決意を述べている。「今年は経済的な事情で果たせなかったが、明年には」と言っている。

翌大正十年十一月に、それは第2次『明星』として実現しているから、このことでも、いろいろ金策も含めた奔走があっただろう。

晶子も、教育の民主化や女性解放の問題、政治的な課題などへ目を向けた発言を積極的に続けていた。

その中には、時に戦争を鼓舞するような言葉が、昂ぶった感情であらわれてきて、その感受性のありように、私などは戸惑いを覚えさせられたりもするのだが、それでもその社会的発言に貫かれているのは、その主観において、今の現実を、より良い現実へと向けようとする張りつめた精神活動であった。

こうした二人にとって、この日は、緊張した日ごろの問題にふれながらも、同時に、たわいない笑いのなかにたっぷり身を浸したにちがいない。

大酒飲みでその奇行が芸術家仲間によく知られている木版彫師の名人、かつて『明星』や『白樺』の挿絵やカットを制作してきた伊上^{いがみんこつ}凡骨が加わっていることでもそれが知れる。

岸田劉生の娘、麗子は彼を「伊上とんかつ」と呼んで面白がったと伝えられているが、その凡骨なる雅号は寛の命名だったという。

そして、この湖畔宛書簡には、この凡骨の絵が描き添えられた。



今年は元日から一週間ほど晴天つづきだったが、先日久しぶりに雨が降った。雪になるかと思われるような冷たい雨で、一日中降りつづいた。

翌日はからりと晴れた。朝、西側のカーテンを開けて思わずオッと思った。

富士は裾のほうまですっかり雪に覆われ、箱根と丹沢にもところどころ雪が下りていたのである。鶴沼からの眺望も冬景色の装いがはじまったのだ。

それでも、こんな寒い朝から、もうサーファーの男女が自転車にボードを載せて、海へむかう道を走っていった。

冬ごもりのない、今の鶴沼海岸風景である。

(やまがみ ひでお)

森 志げ女『死の家』に見る鵜沼村

会員 渡部 瞭



『青鞥』創刊号
装幀：高村智恵子

雑誌『青鞥』は、平塚雷鳥^{らいてう}(1886～1971)が主宰する「青鞥社」が刊行した明治末から大正前期の「唯一の女流文学雑誌」(同誌宣伝文)として知られる。

その創刊号に掲げられた平塚雷鳥の「元始、女性は實に太陽であつた。眞心の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝き、病人のやうな蒼白い顔の月である。」の名文は、今も教科書に掲載されるほどである。

創刊号が発行されたのは、1911(明治44)年9月のことだったが、この創刊号に掲載された『死の家』という短編小説がある。作者は森 志げ女。

森 志げ女(1880. 5. 3～1936. 4. 18)とは、後の筆名は森 志げ、本名は森 茂子で旧姓は荒木。旧肥前佐賀藩士族の大審院判事=荒木博臣^{ひろおみ}の長女にして文豪=森 鷗外(1862～1922)の再婚相手(本人も再婚)である。1902(明治35)年1月4日、茂子21歳、鷗外40歳の時であつた。鷗外との間には翌年長女=茉莉^{まり}、1907年二男=不律^{ふりつ}(翌年2月死亡)、1909年二女=(小堀)杏奴^{あんぬ}、1911年三男=類^{るみ}が生まれた。鷗外には離別した先妻=登志子との間に長男=於菟^とがいた。

志げこと茂子は、「好イ年ヲシテ少々美術品ヲシキ妻ヲ相迎へ」と鷗外が記すほどの美人だったが、芝居好きでヒステリー持ちだったし、無愛想だったため、姑=峰との仲は次第に陰悪になる。2人は生活する場を分け、絶対に同じ食卓で食事をとらなくなる。さらに家計を仕切っていた峰は茂子にだけ小遣いを渡さず、茂子は子供を峰の部屋に遊びに行かせなかった。このため「悪妻」の見本のよう

に評価されることもある。間に立った鷗外は困り果てたという。

『青鞥』創刊号が発行された1911(明治44)年は、彼女にとって子育てに追われていた時期に当たるはずである。この時期に彼女は青鞥社賛助員となる。賛助員には他に長谷川時雨[(1879～1941)劇作家・小説家。後に小説家=三上於菟吉と結ばれ生涯別姓で添い遂げた]、岡田八千代[(1883～1962)劇作家。夫は西洋画家の大家の岡田三郎助、実兄は劇作家=小山内 薫]、與謝野晶子[(1878～1942)歌人・詩人。夫は歌人=與謝野 寛(與謝野鉄幹)]、國木田治子[(1879～1962)小説家。

小説家・詩人=國木田獨歩の後妻]、小金井喜美子[(1870～1956)翻訳家・小説家・随筆家・歌人。東京帝大教授・医師=小金井良精^{よしきよ}の妻]などという錚々たる顔触れが揃っていた。

最後に挙げた小金井喜美子は鷗外の妹だから、志げの年上の義妹ということになる。創刊号発行の段階で喜美子だけは30歳代に入っていたが、あとのメンバーは平塚雷鳥を含めてみな20歳代である。

前置きが十分長くなってしまった。そろそろ本題に入ろう。

『死の家』のあらすじはこうである。

縁談話が舞い込んでくる年頃の弓子は、梅雨が明けた日曜日に、執事の山尾を連れて、新橋から汽車で藤沢に向かう。長年自分を育ててくれた乳母が、丁度七年前前に結婚し、婚家で肺結核を患い、生まれた男の子を連れて鶴沼の実家で療養生活に入り、医者にも見限られる状態になったと聞き、見舞いに行くのである。当日朝の支度から、汽車の中の様子、藤沢から鶴沼までの行程、乳母の病状や実家の環境、見舞いが終わって帰途につくまでが描かれている。

これが志げ自身の実体験に基づく私小説かどうかは判断しがたい。主人公=弓子は乳母や執事に囲まれて育っている。志げの実家は大審院判事だったから、その程度の生活は当然していたであろう。描写の細かさから見て、少なくとも志げは鶴沼を訪れたことは確かなようである。それがどの時点であったかは明確ではないが、大まかに見て明治30年代後半と考えられる。

この時代の鶴沼は、1908(明治41)年4月1日に高座郡藤沢大坂町・明治村と合併し、鶴沼村から藤沢町鶴沼になる直前である。

文中には「鶴沼村」という記述が出てくる。しかし、合併直後には旧来の呼称が習慣的に使われていただろうし、都会人から見れば農村地帯はみな「村」であろうから、これをもって時代特定の根拠にはしがたい。

ただ、乳母の子が7歳以前であり、「後に乳母が亡くなつてから、此子は京橋で待合を出してゐる、父親の妹の内へ引き取られた。」と、その後のことまでが記されているから、鶴沼訪問直後に書かれたものではなさそうである。

明治期の鶴沼農村部を描いた文学作品は、徳富蘆花(1868～1927)の『思出の記』が知られる。『思出の記』は、1900(明治33)年9月から翌年3月まで國民新聞に連載されたもので、『死の家』より10年前、明治20年代の鶴沼を描写している。

また、内藤千代子(1893～1925)の『田舎住ひの處女日記』が『女學世界』8巻15号の懸賞日記文に3等入選、賞金10円を獲得して文壇デビューのきっかけを作

ったのが1908(明治41)年11月のことだったから、『死の家』は、『思出の記』と『田舎住ひの處女日記』との中間期の作品ということになる。

小文は、この『死の家』の記述の中から、今から百年ほど前の鵠沼農村部の姿を読み取ろうとする試みである。

明治末期の鵠沼は、海岸部に3軒の旅館が並び、鵠沼海岸別荘地の分譲も始まっていたが、人口比は農村部の方がまだまだ勝っていた。別荘地分譲が本格化するのには、1902(明治35)年の江ノ電開通がきっかけである。大正にはいると別荘地も次第に整ってくるが、数百～数千坪という敷地に住居が点在する別荘地帯の人口密度は極めて低かった。江ノ電開通以前の海水浴客は、旅館滞在の他に、農家の離れを夏の間借りするというケースもよく見られたようである。

本文に「乳母は、弓子(りゅう)の家を下がる時貰った一時金と、それ迄の貯金とを合せて、二階建ての家を立てた。その頃乳母の云ふには、不断は兄に貸して置きますが、海水浴にお出(い)になる時には、婆あやの内へお出下さいと云ふことであつた。」とあるから、これは普通のことだったのだろう。この建物は、結局乳母の療養所に、そして「死の家」になってしまった。

本文に沿って見ていこう。冒頭から3分の1までは当日朝の支度の様子と汽車の中の様子が描かれている。ここは鵠沼と直接関係ない記述なので割愛する。

「九時十分新橋發の汽車で」「藤澤に着いたのは十一時少し過ぎであつた。」とあるから、当時の新橋～藤沢間は2時間弱かかったことが判る。

続いて「停車場前の茶屋で休んで、弓子は東京から持つて來たサンドキツチや西洋菓子や果物を取り出して食べて、山尾にも分けて遣つた。結核の病人のゐる所で、物を食べない用心をして、こゝでいろんな物を食べたのである。」とある。当時流行していた結核の病人に対する心得が読み取れる。

「そこで車を(やと)傭つて、道のでこぼこした田舎道をがたがたゆられて出掛けた。線路を通り越して横へ曲ると、まだ餘程遠いのに、乳母の家の大きな松の木が見える。弓子は子供の頃兩親に連れられて乳母の家へ來たことがある。松の木の多い(くげぬまむら)鵠沼村でも、此松は優れて大きく高いので、乳母は自慢してゐたのである。傍に少し背の低いのが二本並んでゐてそれに注連(しめなは)縄が張つてあつた。」

ここで、乳母の実家は鵠沼の何処にあつたかを推理したい。

先ず「線路を通り越して」とあるから、東海道線より南側と判断できる。線路を通り越したのはおそらく一本松踏切であろう。あるいは学校前踏切も考えられる。そこから「横へ曲」り、「餘程遠いのに、乳母の家の大きな松の木が見える」

その「松の木が多い^{くげぬまむら}鵜沼村」でも、此松は優れて大きく高いので、乳母は自慢してゐた」松を目指して車(人力車)を走らせるのである。

「松の木は目の前に見えてゐても、がたがた車が乳母の家に着くまでには、かなり^(マ)時が立つた。」

これほどの松は、筆者の記憶する限り仲東の高松本家の松しか考えられない。

80～90歳代の古老に訊いても同じである。時代は明治後期であるから、確言はできないが、可能性は大いにあると考えたい。

高松本家を直接調べることは今のところできていないが、周辺の関係方面を当たってみても、『死の家』に述べられているような事情が高松本家に存在していたことを記憶しておられる方は見つかっていない。もちろん、これはあくまでもフィクションなので、数件の事情が複合して話が組み立てられていることも充分考えられる。ここではそれ以上の詮索はしないで置きたい。

「二階建ての乳母の家」は、「戸口の内は広い土間である。そこへ這入つて覗き込むと、六畳と八畳との下座敷があつて」という大きさである。乳母の退職一時金と貯金で、当時はこれだけの家を建てることができたのである。

乳母の子は、「今しがた^{おもや}母屋の人達が宿へまゐりますのに附いて行きましたが、もう歸る頃」だとある。「宿」にルビはないが、これが「しゅく」だとすると、当時の鵜沼では藤沢の旧宿場を鉄道時代になってもそう呼んでいたと思われる。

次に「それでもお薩の新を先程掘らせたのが、ふかしてある」のを「薩摩芋は相變らず結構よ。では御馳走になつて来るわ」と「薩摩芋なら皮があるから(結核患者の家のものでも)好い」と判断して食べる。鵜沼におけるサツマイモ栽培は、明治初期に宮ノ前の小林榮蔵(諸榮)が六郷(川崎)から[相州白]という品種を導入したのが最初とされる。それが鉄道が関西にまで延びた段階で、関西を商圏にするほど普及した。

乳母が弓子を養育していた頃も、里帰りのときの土産として鵜沼名産となった



図抜けて高かった高松本家の松(今はない)

荻田の火の見より(1957年)撮影:山上敏夫氏

サツマイモを持ち帰ったであろうことは、「薩摩芋は相變らず結構よ。」の言葉から推定できる。

この文章の冒頭に「今年の梅雨は例年にまして、雨が多かつた。」とあり、「久しぶりで今日は、晴々とした、好い天気になつた」と続くから、季節は梅雨明けで、7月中旬と考えられる。「お薩の新を先程掘らせた」のは、かなりの早掘りである。

「山尾に促されて、弓子は歸^{かへり}支度を始めた」時、「もう四時近いのである。片蔭がすっかり出来て、一面の青い畑の上を涼しい風が吹いてゐる。」この「一面の青い畑」とは、この季節ならおそらくサツマイモ畑であろう。「涼しい風」は、この時間ではまだ海からの南風である。

帰り支度も整い、いよいよ車に乗り込もうとすると、車の廻りには近所の子供が珍らしさうに集まつて來た。「東京の女は妙だなあ。夏首巻をしてゐらあ」なんぞと顔を見て云ふ。きたない子等の中に乳母の子は別物の様に美しく見えた。」好奇心旺盛で、あけすけな「きたない子等」である。しかし、これが悪意からのものでないことは、「鼻を垂らして、赤いくしやくしやした目をした子供達も聲を合せて「さよなら」と云ふ。」と続けることによって、弓子も認めているのである。彼らが「赤いくしやくしやした目をし」ているのは、当時流行ったトラコーマ(トラホーム)によると思われる。

最後に、この物語の舞台と比定しておいた高松本家について触れておこう。高松家は仲東集落の中央に屋敷を構える鵜沼きつての旧家である。

平安末期、平 景正(鎌倉権五郎)が高座郡の私領を開発し、伊勢神宮に寄進を企図、これが大庭御厨^{おおばのみくりや}として国司により正式に認められた1116(永久4)年の前年、法印と称する修験者だった高松家初代が没したという記録がある。今に続く鵜沼の姓の初出である。さらに1195(建久6)年、鵜沼毘沙門堂が修験祐範により開基創建された。江戸中期に廃寺となるも再建され、1870年以来屋敷内に現存する。

1889(明治22)年、村制が施行された鵜沼村初代助役が高松祐重であり、長男=高松良夫は1897年に村長に就任、1908年4月1日に高座郡藤沢大坂町・明治村・鵜沼村が合併し、藤沢町になった時の初代町長となった。また、鵜沼唯一の病院=高松病院を経営するなど、今日に至るまで地元のために多大な貢献をしている。

最大の疑問は、このような名家の息女が、例え花嫁修業のためと仮定しても東京に乳母として奉公させることがあったのかという点である。

※引用文中のルビは(マ)以外は原文通り

(わたなべ りょう)

香煙の壁

今井 達夫

さし絵 岡田 哲明

林のなかを歩きまわっていると、不意に海を見おろす崖の上に出た。加地はぎょっとして、足を踏みしめた。この海岸町については、もっと知識があるはずだった。駅を出るときは秋の日が射していたのに次第に曇って来て、日射しで方向を見当づけるわけにはいかなくなったが、こんな不意打に合うのは平静を欠いていたからに違いない。

加地は立ったままタバコに火をつけ、曇り空の下の海面に目をやり、今日会社で同僚とかわした会話を噛みしめた。

「昨夜はどうしたんだい？通知はとどいたんだろう、もちろん。」

「いただいた。しかし、おそく帰ったのだから、間に合わなかった。」

「たぶんそんなことだろうということになったが、仲間には不思議がっていた。君のところには通知以前に知らせがあつてしかるべきだと思っているからね。」

「先生はなんとかおっしゃっていたか。」

「誰かが君のことを云い出したが先生はなにもおっしゃらなかった。ところでこれをたのむ。どうしても抜けられなくなったんだ。」

木本は内ポケットから、香典の包みを出した。

その香典の包みは、加地自身のと重なって内ポケットにおさまっている。それが加地の胸を重たくおさえている。加地は時計を見た。そろそろ葬儀がおわり、一般告別式のはじまる時刻がせまっていた。駅からまっすぐ行けば、もちろん葬儀に間に合ったが、ふと気分が重くふさがれて脇道へそれてしまった。林のなかで方角を失い踏み迷ったが、この崖の上に出れば野口教授の家に下りて行く近道



を知っている。五分とかからないだろう。こうしていると、ますます足が動かなくなる。加地は未消化の食物が胃の腑につまっている心持をおさえて、歩き出した。

下り口の見当をつけて林を出ると、あそこ、七年前にはなかった新しいスタイルの住宅が建ちならんでいる一面に出会い、車の通るほどの道がついていた。そのままひとりで下りて行くと、分かれ道の右の方から黒ずくめのひと目でわかる洋装喪服の女性が、こちらへ向かって近づいて来た。目を向けると、あのころ知っていた島野夫人だった。

「おや、これから？」

「あら、加地ちゃん。」

夫人はあのことと同じ呼び方をして

「——しばらく。加地ちゃんも？ それにしても、おそいじゃなくて？ どこかまわったの？」

「いいえ、二時からじゃなかったんですか。」

「一時からお葬式、二時から告別式よ。」

「そうだったんですか。思いちがいをしていた。しかし、奥さんはお葬式には？」
咄嗟に嘘が口をついて出た。

「あたくし、あのお宅とちょっと行き違いがあつて、一年以上おつきあいがなかったのよ。ご通知をいただいたけれど、どうしようかと迷って、——いいお連れができたわ。」

ひとりで肩をならべて、分かれ道の別の方を歩き出した。

告別式ははじまっていた。ひろい道から野口教授邸へまがる角に、焼香を終えた弔問客たちがかたまっている。金木犀の匂いが流れて来た。

門をはいると、鯨幕を張ったまえのテントの下に机が三つ並んでいた。加地は手前の机に合いオーバアを預け、次の机でふたつかさねた香典包みを出した。受付にいる三人の青年は見知らぬ顔だったが、香典包みを受けとった青年が姓名を見て反射的に加地を見上げた。どきりとした。あなたの御香典はお受けいたしかねます、そういう言葉がその口から出るのではないかという予感が戦慄させたのである。が、そんなことは起こらなかった。

受付の反対側の庭へはいる小門に矢印が付いていた。が、加地は島野夫人を先に立て、こっちこそいい連れができたと言いつつ楯にしながら入って行った。ひろい芝生はやや黄ばみはじめ、右手の建物の庭に面したホールの前に、藤棚を天井にして

焼香台がおいてあった。祭壇はホールに飾ってあり、左右にならべた椅子に野口教授をはじめ近親がかけていた。

祭壇にかざってある夫人の写真は、真珠の細いネックレスをかけ、無邪気な眸がほほえみかけている。三人ほど待って、島野夫人とならんで焼香した加地は、遺族席へ向かって目礼を送った。遺族席といっても、子供のない家庭だから、教授と目が合った。いつもとすこしも変わらない澄んだ目がまっすぐ加地に向いていた。そのとたん澄んだ目に濃い光が加わったと感じたのは、加地の思いすごしかも知れない。

低くお辞儀をして、庭を横切って小門を出ると、あのころの仲間だった高倉が待っていた。

「おそかったじゃないか。どうしたんだ。」

「時間をまちがえておぼえこんでしまったものだから。」

島野夫人に対して咄嗟にうかんだ嘘が、こんどは実感があった。

「それにしたって、昨夜も、——いや、いい。あっちへこないか、連中がいる。」

高倉は仲間うちでは単純な性格の持主だが、ちらと島野夫人に気兼ねを見せた。

「あたくし、失礼いたしますわ。加地さんよろしかったら、お帰りにお寄りになりませんか？亡くなったかたの思い出ばなしいたしましょう。では、ごめんあそばせ。」

島野夫人は高倉にも会釈をして、歩み去った。

加地は高倉にうながされて、玄関に入った。たくさんの履物が、窮屈にそろっている。奥の日本座敷には十人ほど集まっていて、顔を知らぬ客もいた。

敷居際に立ってやあと声をかけると、部屋中の顔が振り向き、査問会に引き出された心持におそわれて、加地は口のへんに愛想笑いをうかべた。

仲間たちは学生時代野口教授をかこんで、さんざん世話になった。この家にもしばしば訪ねて、夫人にも世話になった。霊柩車まで夫人の柩をみんなでかつぐ相談がまとまったところだった。加地は自然な状態でこのグループに溶け込む努力をした。東京から自分で車を運転してきたのが二人いて、それに乗って火葬場まで送る相談もできあがっていた。

火葬場は海からずっと離れた丘陵と丘陵とのあいだにあった。加地たちは教授たち近親の控室からはなれた、高倉のとった控室にあつまった。

「いいかただったな。僕たちは随分お世話になった。僕たちはご好意に甘えて随分御迷惑をおかけしたが、一度も厭な顔をお見せになったことがなかった。蔭日

向のない、嘘のない、翳などまったくない、透明なかただった。まだお若いのに、とうとう御恩返しができなかったのが残念で、申しわけなかった。」

高倉の言葉に、みんな同感の色をうかべた。故人は彼らより少し年長だが、三十代半ば前であった。

加地は手洗いを求める振りをして、控室を出た。手洗いは控室の裏手にあった。手洗いをした加地は、丘陵のゆるやかな径を登って行った。こうしてひとり離れた場所へ行くことが不自然ではないかと不安におそわれたが、仲間たちのあいだにいるうちに何かしゃべることになる方がより不安であった。何もしゃべらないことも不自然だろう。そして、何かしゃべることが失言するかも知れない不安があった。

高倉の追憶は、そのひとのなきがらを火葬場へ送って来た者の感傷に上塗りされているのは当然だけれども、みんなの同感に嘘はなかった。しかし、加地の場合はもう少し複雑だった。同感もするが、否定する面もかの女は持っていた。だが、同感する面だけをみとめるなら、気楽になれるが、否定する面は不安を誘う。

去年の春、加地は会社の命令で半月あまりアメリカへ出張した。異例の抜擢だった。その異例が加地をいい気にさせ、ちょっと狂わせた。

帰って来ると、教授の態度に変化があった。表立った変化ではないが、加地はよそよそしい心持の壁にぶつかった。加地は教授を敬遠する気分をおさえきれなかった。できるだけ不自然に振舞うまいと用心したが、連れなしでは逢わないよう心がけた。今日駅からまっすぐ弔問に行かなかった不安の根は、そのときはじまり、ずっとつづいている。

控室のあたりにちらちらと人影が動くのを見て、加地は下りて行った。仲間たちと顔を合わせて以後神経質に彼らの言動を観察して来たが、彼等は加地の神経に触れて来なかった。すくなくとも、彼等はなにも知らない、そういう結論を出した加地は、尚も自然な振舞いをつづけることに自信を持ちはじめた。しかし、教授の前ではどうだろう。あまりに仲間たちと同じ自然な態度を示しつづけると、はねかえりがきびしくなるかも知れない。そうかといって、自然でない態度は思いつくという報復をうけるだろう。恭順がどちらの場合にも逃げ道になる。そして、こういう場合、恭順には非難に対する隠れ蓑になる可能性がある。

扉がひらかれ音を立てて引き出された台の上でなきがらは焼き尽くされ、そこに夫人はもういなかった。加地はしまいに近く高倉と挟み箸をしたが、余熱のほてりが手の甲にかかって来ただけだった。

骨箱を膝に乗せた教授の車を見送り、加地たちの車もつづいたが、門の前で下りると金木犀の匂いと線香の匂いとまじった空気がさっきと同じように顔を包んだ。もう何も残っていない。消え去った。残っているのは、仲間たちと霊柩車までかついだ棺の肩の重みだけである。

簡素につくりかえた祭壇は、やはりホールに飾ってあった。加地たちは焼香して、一緒に辞した。先生のお宅に御迷惑をおかけしてはいけないからと高倉が云い出し、車のなかでとなりの海岸町か横浜まで出て食事をする相談になっていたが、このときになって加地は寄りたところがあると、仲間からはずしてもらった。高倉は心得顔にうなずいた。はじめそのつもりはなかったが、高倉の心得顔を見て、島野夫人を訪ねる気になった。仲間からはずしてもらったのは、祭壇の写真を見て、二度目のぎょっとした衝撃に打たれたからである。写真の顔はなきがらを焼かれた今も、無邪気な微笑をうかべていた。

歩いて行くと線香の匂いが遠ざかり、金木犀の匂いが濃くなった。島野夫人はいくらかの知識を持っているだろうか。

「いらっしやい。すっかりおすみになって？ あ、ちょっと。」

手をあげて制して、島野夫人は塩と水を取りよせた。近代女性のひとつの型だが、こういう礼式を守るのは幼い時代の家庭の延長だろう。それに比べると、今日火葬にした野口夫人は本気でこういう礼式を守らないと気のすまない人だった。そのくせ率直な、衝動的にどきっとする言葉を口に出して平気でもあった。



応接間に紅茶が運ばれると、島野夫人はウイスキーを垂らして、

「どうぞ。でも、お気の毒ねえ、まだお若かったのに。」

「心臓がわるかったと聞きましたが、どんな工合だったのかしら。」

「それは加地ちゃんの方がご存じのことではなくて？ あたくし、さっき申した通り、一年ほど行き来なかったのよ。」

「あ、そうだった。しかし、どうしてまたそんな。」

「野口先生があたくしをお嫌いになったの。奥さまに悪いことばかり教える、けしからん女と認定なすったのね。奥さまが直接おっしゃいました。」

「悪いことって、どういうことです？」

「さあ。」

島野夫人は笑って、ほかのことをいった。

「野口先生、すこし性格がお変りになったのじゃないかしら。気むずかしくおなりになった、奥さまがおっしゃったのよ。それ以来、奥さまの方ではどうということなかったようだけど、あたくしの方から御遠慮することにしたの。」

「いつごろからです？」

「一年前、もうすこし前かしら。」

加地はすばやく歳月を計算した。アメリカへ出張したのは、去年の三月だ。すこしずれがある。加地は胸のなかで、あたまを振った。

島野夫人は露骨な表現をさけたが、野口教授に対する不快を吐き出すために呼んだとわかると、加地は三十分ほどで辞去した。利口な夫人だし、材料も持ち合わせていないようで、これ以上なにも引き出せそうになかった。

加地は優秀な学生で、野口教授に可愛がられた。内向的な性格でつとめて表にあらわさなかったが、自負心は彼のなかで燃えくるめいていた。卒業の前年の秋、不意におそいかかった病魔で倒れたつまずきは、だから、周囲の受けとり方の幾倍もの挫折感をあたえた。就職先も決まっていたがそれどころではなく、長い入院生活から解放されこの海岸町のサナトリウムにはいったのは、翌年の春であった。しかし、芯が丈夫だったにちがいない、間もなくサナトリウムを出て付近に間借りをして療養生活を送れるようになった。サナトリウムも間借り生活も、教授の配慮によるものだった。

健康をとりもどすと周囲は彼の幸運を祝福したが、彼のなかの挫折感は深い痛手を負わせて回復しなかった。見抜いたのは野口教授だけだったかも知れない。教授は御破算になった就職口を復活してくれ、加地は一年遅れただけで社会人になった。それとともに東京のアパート生活にもどったが、出来事はこの海岸町にいるあいだにおこったのである。

予後療養の日課のひとつは、散歩だった。加地は起伏のある海岸町を歩きまわり、当然のように教授の家に寄った。教授が不在のときもあった。不在のときは島野夫人のグループが訪問していることが多く、加地は有閑夫人たちの遊び相手になった。そうしているあいだに、教授夫人との情事がはじまったのである。しかし、情事と呼ぶためには結実のない、情事という言葉からそれた奇妙な関係であった。それは結実がなく、未完成の関係であった。ここには詳述しない。奇妙な関係にいら立った加地がせまると教授夫人は憂わしげにいった。

「そんなことをすると、主人から追い出されてしまうわ。いつか訊いたことがあるの。そうしたら、浮気をしたら追い出すっていわれたわ。加地ちゃんあと一生引き受けてくれる？」

あのときも変な印象をうけてつまずいたが、示唆を含んだ言葉であることが次第にわかって来た。ただし、かの女が示唆したと思うのではない、その言葉自体とそれを口に出したことが、示唆を含んでいたと現在に引き当てるのだ。

こまかな雨が合オーバアの肩を濡らした。加地は駅へ急いだ。

加地はアメリカへ出張する半年前結婚していた。媒酌人は会社の重役をたのんだが、野口教授夫妻が列席したのはもちろんだった。メン・テーブルに座ってもらったのももちろんだった。同じ列だから夫妻の動静表情は見えなかったが、教授は加地の結婚を晴れやかに祝福するスピーチで飾ってくれた。挨拶をして旅行に出るとき顔を合わせたが、夫人の表情にも翳りはなかった。

あのときまでは教授のよそよそしい態度はなかったと信じる事が出来る。その後夫婦そろって挨拶に行ったときも変化はなかったし、夫人も曇りのないもてなしを与えてくれた。もしか何かあったら、その後、アメリカへ出張している前後のことと推定できる。前後といっても、それ以前ではあるまい。出張の挨拶に行った際の夫人の態度が、それを告げている。

なにかあったらとは、夫人が秘密を告白したという意味だ。だが、ずっと長く守ってきた秘密を、どういう理由で告白したのだろう。アメリカ出張の挨拶に行ったとき、日曜なのに教授は不在で女中も留守だった。加地は試してみる気になった。数年前の擬似的な情事をくりかえしてくれとせまった。あのとき一生を引き受けてくれるかといわれてつまずいたのは、就職がだめになりはたして健康体を取りもどせるかどうか見当のつかなかった時期の気後れが、彼のなかにあったからだだったと、後になって気付いた。今は違う。出世をしたのねと夫人がいった。こういう状況になって夫人はどんな反応を示すか試したかった。

「往復空を飛ぶのだから、もしかするとこれっきり逢えないかも知れない。もう一度だけ。」

「何いってるのよ。加地ちゃん新婚ほやほやのくせに。」

夫人は拒絶したが、これっきり逢えないかも知れないという言葉は感傷を引き出すのに成功した。辞去する時となりの海岸町までドライブをし、別れるとき手を握り合った。

加地はそこら女というものを知っていたとはいえない。現在なら、もっと押

すことが女を動かすと思うが。

それだけのことが、告白の動機になるのは常識のそとにある。が、あの夫人の場合には通用しないかも知れない。数年間、保っていた秘密をひょいと口に出してしまう突然変異は、かの女にはありうることであった。

加地の妻は風邪気味で寝ていた。

「お悔やみのかた、たくさんいらして？」

「ウン。」

「あたしが病気で失礼するってこと、もうしあげてくださって？」

「そんな余裕はなかった。」

「治ったら、伺わなければならないわね。」

「かえって、ご迷惑じゃないかな。」

そうはいったが、その週の日曜日、野口教授を弔間に行くという妻を、加地はとめなかった。教授が妻に対してどんな態度を示すか、それが知りたかった。むしろ、いい機会だと考えた。

夕方帰って来た妻に向って、加地はさりげなく訊いた。

「先生はどんなご様子だった？」

「考えていったよりお元気だったわ。もっとも、ほかにも大勢お悔やみのお客様がおいでになったから、元気にしていらしたのかも知れないけれど。」

「それじゃ、僕も伺えばよかったかな。」

「ほとんどご婦人がたばかり。野口先生ご婦人に人気おありになるのね。祭壇はホールに飾ってあって、あたしたちみんなそこへあつまったの。綺麗な写真ね。奥さまも人気おありになるわ。お香が部屋中にこもるくらい、次から次へお香をあげて、まるでお香の煙が壁みたいに厚くて、——ああ、そうそう。お言伝てがあるの。失礼しようとしたら玄関まで送って下すって、何かお話があるから次の日曜日にでもおいでいただきたいって。とても丁寧におっしゃったわ。」

「……」

加地は答えずに目をつぶった。背筋に冷たいものが走り、それから体中が熱くなった。いよいよはじまるかも知れない。

「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成20年10月～平成21年3月) 総務担当

運営委員会

9月30日(火)

10名出席

平成20年10月例会 10月21日(火) 10時～12時

15名出席

議題1 講演会「鵜沼村庶民の弘法大師信仰」の報告 — 参加者131名

事前の広報活動も奏功し、盛況であった。大変好評で資料の追加要望もあり対応中である旨が報告された。

議題2 10月18,19日公民館祭りの報告 — 『阿部昭の見た鵜沼風景』

をテーマとして、作品(文章)の一部と関連する周辺の写真とを数多く展示した。鵜沼の生んだ作家であったことから知人や近所の方をはじめ興味をもたれた多数の方が閲覧された旨が報告された。

議題3 会誌97号配付について — 掲載内容を説明するとともに、出席者には席上配付した。欠席者には従来通り別途配付とした。

お話 — 「日本サーフィン伝説」ビデオ鑑賞

今回の例会は鵜沼海岸のサーフビレッジにて行なわれたこともあり、場所柄に相応しいサーフィンのお話とした。WOWOW製作の1時間半ビデオを鑑賞した。俳優坂口憲二によるインタビュー形式で起源から歴史、先駆者等地元に関わる人物も登場し興味深いものであった。

運営委員会

11月 7日(火)

7名出席

平成20年11月例会 11月12日(火) 10時～12時

16名出席

議題1 会誌について — 97号の配付が完了したことが報告され、次号98号について寄稿の案内がされた。

議題2 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中状況が報告された。

議題3 今後の例会のお話の計画について — 12月および1月の予定が案内された。

お話 — 「蓮池の移り変わり」

地元に住み「蓮池の自然を愛する会」の会長、吉田敏平氏にお話していただいた。住民の市民活動により特別高圧線設置を阻止したり、ゴミの池と化していた池を蘇らせたり、公園を設置したことなど、蓮池と生活、環境との関わりについて再認識させる内容であった。

運営委員会

11月25日（火）

10名出席

平成19年12月例会 12月 9日（火）10時～12時 26名出席

議題1 新年会について — 1月23日例年通りアコレードにて例会に引き続き行う予定の内容が説明された。

議題2 会誌「鶴沼98号」について — 3月末日発行および掲載予定の項目案について報告された。

議題3 その他 — サークル交歓会の報告、内藤千代子著作本のコピー版が完成した等の報告があった。

お話 — 「大正・昭和の鶴沼の思い出」

大正12年頃から鶴沼に住まれ、宮崎通りの土地提供者・宮崎家に嫁がれた宮崎弥代子さん（大正5年生まれ）に大正・昭和の鶴沼の思い出をお話していただいた。有田会員の質問に答える形式で、関東大震災の自宅と周辺の被災状況、小田急線開通の頃の話、キツネ火を見たときの様子他ははっきりと記憶されていることを写真の説明も交えながらお話していただいた。高松山周辺の当時の貴重な写真やお話は鶴沼の昔を知る上で大変興味のある内容であった。

運営委員会

12月23日（火）

12名出席

平成21年1月例会および新年会 1月20日（火）11時30分～14時

28名出席 場所 鶴沼マリンロード（鶴沼海岸商店街）アコレード

例会 報告事項 — 会誌98号の現在の状況、ホームページに鶴沼の碑および碑文の一覧掲載、内藤千代子の著作のデータ化の進捗状況他が報告

された。

新年会 内藤会長挨拶、鈴木会員の音頭により乾杯、出席会員による今年の目標、近況等の報告、宮戸会員によるアカウミガメ孵化の写真パネル披露。歓談、ビンゴゲームにより和やかなムードの中懇親を深め有田副会長の閉会の挨拶でお開きとなった。 司会中島会員。

運営委員会 1月27日（火） 11名出席

平成20年2月例会 2月10日（火）10時～12時 21名出席

議題1 新年会の報告 — 状況および会計報告がされた。

議題2 会誌「鶴沼」98号について — 掲載項目の決定およびその準備状況が報告された。

議題3 今後の例会のお話計画について — 6月までの予定項目について説明された。

議題4 会誌100号記念構想案について — 『相模の国 準四国88ヶ所』をメインテーマとし、過日の講演内容および関連資料、会員による札所巡り検証（チームを編成し分担して全員参加をめざす）、紀行文等で構成する案が説明された。

議題5 各プロジェクト報告 — 現在の進捗状況が報告された。

お話 — 「鶴沼の指定文化財について」

文化財保護委員でもある中島会員からお話をいただいた。鶴沼地区には国指定の人間国宝（染色）田島比呂子氏をはじめ、県指定の重要文化財工芸品、市指定の重要文化財建造物、重要文化財史跡、有形民族文化財、国の登録文化財それぞれ1件があり、それらについて、パワーポイントを用いて詳細な説明および解説をしていただいた。

運営委員会 2月24日（火） 11名出席

平成20年3月例会 3月10日（火）10時～11時30分 18名出席

議題1 会誌「鶴沼」98号について — 編集内容が報告された。3月24日製本および発行予定。手伝い応援者の募集展開をした。

議題2 各プロジェクト報告 — 現在の進捗状況が報告された。鵜沼ゆかりの文化人の小冊子化は、今年度予算で完成させたい旨報告があった。

その他 — サークル交歓会、会誌100号記念の構想、6月までのお話の計画内容につきそれぞれの報告がされた。

県立藤澤高校出身の彫刻家、熊坂^{なまこ}兌子氏（会員外）が同席された。氏は、かねてより藤沢市美術館、博物館の設立運動を推進されて来たが、母校が廃校になるに付き、跡地を具体的候補地とする署名運動をはじめ、あらゆる方法で、その実現に向けて運動を進めたいので、協力してほしい旨の説明があった。

お話 — 「森志げ女『死の家』にみる鵜沼村」

渡部瞭会員よりお話いただいた。森鷗外の再婚した夫人志げ女の小説『死の家』（平塚雷鳥主宰の女性文芸誌『青鞥』創刊号にて発表-1911年）に描写されている明治後期の鵜沼村の様子を場所、家、人の特定を考察しながらの解説は大変興味深いものであった。

（文責 佐藤 弘）

編集後記

- * 近頃、庭木にミモザとオリーブをよく見掛けます。ミモザの黄色い花房は春の兆し。日本ではギンヨウアカシアとフサアカシアをどちらもミモザと称していますが、ヨーロッパでミモザといえばフサアカシアです。花はよく似ていますが枝ぶりや葉の様子が違います。鶴沼ではギンヨウアカシアが多いようです。かつて小豆島が北限といわれたオリーブが鶴沼でも結実します。これも地球温暖化の一現象でしょうか。
- * 島本千也氏の「阿部昭の鶴沼風景」は今号掲載の（下）を持って完結しました。島本千也氏には心より感謝いたします。
- * 吉田敏平氏の「はす池断想」は昨年 11 月例会でのお話の内容を文章にして頂きました。氏は蓮池の自然を愛する会会長として蓮池の保全に尽力されている方です。
- * 2008 年夏、湘南海岸でアカウミガメの赤ちゃんが誕生しました。宮戸光会員にその様子を撮った大きなパネル写真を新年会の席上見せて頂きました。それを会誌に載せたいとお願いしたところ、多忙な市議活動の合間を縫って執筆して届けて下さいました。宮戸会員は 30 歳代、ほとんどが年配者の当会会員の中で貴重な存在の若手です。
- * 昨年 12 月例会のお話「大正・昭和鶴沼の思い出」は宮崎家に保存されていた貴重な古い未発表写真をスクリーンに写し、それを見ながらの思い出話が宮崎弥代子さんと有田会員との対話形式で行われました。その写真について弥代子さんが話された思い出を企画の方にまとめて頂きました。
- * エッセー「くげぬま断章」（Ⅰ）を投稿して下さいしたのは、鶴沼海岸にお住まいの山上英男氏です。氏は長年教職にあり、法政一中一高並びに法政女子高の学校長を務められました。なつかしくお読みになった教え子の方もおられることでしょう。次号以降（Ⅱ）（Ⅲ）…と続きます。乞ご期待。
- * 《森志げ女「死の家」に見る鶴沼村》についての考察は、3 月例会で渡部会員がお話された内容を記述して頂きました。その緻密な考察は鶴沼出身ならではの興味ある内容でした。
- * 今井達夫遺稿の紹介は第 4 編目になります。今号は、小説「香煙の壁」を選びました。さすが短編の名手といわれただけあって、作者の才能がキラリと光る珠玉の小品と編集子はおもいますが、皆さまの読後感はいかがでしょう。（岡田）

『鵠沼』 第98号
平成21年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>